

## Introduction

### Chapter 1 Tokushima

初日前 雨から生まれるもの

Day 01 四国とチベット

Day 02 おばあさんと桜

Day 04 シャガの道

Day 06 走るお大師様たち

### Chapter 2 Kochi

Day 19 歩けるところまで、歩いてみれば

Day 31 白い犬と足を読む女性

### Chapter 3 Ehime

Day 37 一筆書きの二重柿

Day 55 三角寺、今昔ものがたり

## Epilogue

Day 76 晴れ

## 旅程一覧

Tokushima

Kochi

Ehime

Kagawa

Koyasan

## その他

著者略歴

Hakusan Creation

# Introduction

お杖をつきながら  
雨 風 光を全身に受け  
山道 あぜ道 車道を歩き  
森や町 トンネルを抜けました  
橋や川 海をわたりました

たくさんの遍路に会いました  
おじいさん おばあさん 子ども  
おじさん おばさん 若者に励まされました

「お遍路さ～ん」「お大師さま～」  
道のあちこちで呼ばれ  
小夏に八朔 お饅頭を両手にいただきました

カニやミミズを救い 桜や野花に目を奪われ  
蝶やツバメに足を止め  
ベンチや地べた 岩の上に座っては  
ともに空を仰ぎ 海を見つめて思いました

空海は いったい何を考えていたのだろう……

人が 自分ではなく  
自分とともに歩む空海とだけ向き合えば  
自分が 人ではなく  
人とともに歩む空海とだけ向き合えば  
空海が 高野の山の岩かげから どんどん出てきて  
この世に空海が どんどん増えていく

それが 空海の願いだったのかもしれないと  
遍路道の自然と人びとは 感じさせてくれました

空海のこともよく知らず、「慣れ親しんだ小さな日本の、小さな四国を歩いて何になる？」と思いながら、しづしづとアメリカ人の写真家の夫の通訳としてついていき、結局

は3周もすることになった遍路道。それは、いろいろな人が「生きる」ことに対する様々な思いを抱きながらまわっている多次元的スーパーロードでした。

そこへ、切っても切っても同じ顔の金太郎アメのように、おじいさんやおばあさんがお接待を持って、次から次へと現れては消えていきました。現実と民話の世界が、当たり前のように共存していました。

かわいい犬でも散歩させていないかぎり、人が話しかけてくることがない今日。日々、悲しいニュースが流れ、人は顔を見て話すよりは、スマホの文字での軽いやり取りをすることで、必死に自分の心の居場所を守ろうとしています。

人と人との距離がこうしてどんどん離れてしまう前に、遍路道でどうやって見知らぬ人に声をかけられ、自分もかけるようになったのか、どんな会話をしたのかを書き残しておきたいと思いました。

この本は、遍路道で出会った人びとのオンパレードです。

日米の夫婦ということもあり、いろいろな人から話しかけられました。遍路道を歩いていない人は、黙って歩くはずの道が、こんなにも人との会話にあふれていることを疑うかもしれません。また歩いたことがある人は、「そうそう、こんなこともあった、あった！」

自分の経験に重ねて、喜んでくださるのではないでしょうか。

最初は宗教色をおびた異様な環境に身をおくようで抵抗があり、またテレビのドキュメンタリーとはちがう世界が見えてきて、怒ったり、疑ったり、しょんぼりしたり、ケンカをしたりといろいろありました。二ヶ月の間に、気持ちがグルグルと変わってきました。

この本には、そうした思い出を美談で飾ることなく、人と関わることから生まれる葛藤、気まずい経験、病気によるパニック、お寺、宿で受けた印象などを感じたままに書いたつもりです。

「遍路の分際で……」という考え方が今も残っているようですが、遍路道は、遍路が空海とともに歩く「同行二人」の道です。ひとりの遍路が、空海とともに何を経験してどう感じ、どう思ったか？ それを書くことも、いいのではないのでしょうか。

様々なことがあったからこそ、最初の1周から18年、最後の1周から10年たった今でも、人間への信頼と尊敬を心の中で支えてくれています。遍路としての思い出は、家の壁にかかっているがためにいつも視界のどこかに入ってくる、のどかな田園の絵のようです。

遍路道には、いろいろな歩き方があります。1周目は1998年の春で、「順打ち」と呼ばれる時計まわりに一番から順番に八十八番へと歩いてみました。2周目は1999年の春で、「逆打ち」と呼ばれる反対まわりに歩いてみました。

1周目と2周目のように、ずっと連続で歩き通すことを「通し」というのですが、3周目はまとまった時間がとれず、2002年から2006年の間に5回に分けて1周してみました。このように分けてまわることを、「区切り打ち」と呼びます。

八十八ヶ所だけでなく、奥の院や別格の二十ヶ寺、石鎚山、空海ゆかりの番外のお寺なども訪ねたので、毎回の歩行距離は1200キロを越えました。

3周ともそれぞれにちがう体験となりましたが、この本の内容は、もっとも詳しく書き

残っていた1周目の遍路日記からの抜粋がほとんどです。

ともかく雨に降られた1周目でしたが、そこに2周目、3周目での忘れがたい出来事のいくつかを加えて、ひとつの旅のメモワとしてまとめました。

文中の風景のほとんどが1998年のものですから、最近になって遍路道を歩かれた人は、遍路道やお堂、御蔵洞などの描写のちがいに気がつかれることと思います。当時の遍路道の状態は、「あとがき」にも書き加えておきました。

当然のことながら、プライバシーの点から登場人物の名字、性別や年齢、出会った場所など、変えてある場合があります。

四国の人やほかの遍路から聞いた話は、ただ「聞いた」ことに過ぎず、信憑性はわかりません。中傷、批判する意図はなく、遍路道での地元の人たちや遍路同士での何気ない会話を、あるがままに再現しただけです。

そういった意味で、この本の内容はノンフィクションをもとにしたフィクションとしてご理解した上で、読んでいただければと思います。

最後に、遍路道でお世話になった方々にお礼を申し上げます。

年齢も社会的立場も様々な方々に、お接待をいただきました。その方々を文中で表現するにあたっては、ともかく困りました。日本語の場合、相手によって言葉の使い方が変わってきますが、遍路として歩いた身にしてみれば、どなたも「空海を通してご縁のあった人」なので、表現を統一したい気持ちでいっぱいです。

ところが統一してしまうと、そのときの親しみや距離感、独特な雰囲気などが消えてしまうのです。そのため、「おっしゃった」「いただく」など尊敬語、謙譲語を使うべきところも、あえて「言った」「もらった、くれた」という言葉を使用している箇所があります。

礼を欠くつもりは、全くありません。もし不敬に感じられましたら、ここでお詫びを申し上げますとともに、皆様とご縁があったことに、心から感謝を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

2016年7月31日 大坪奈保美

# Chapter 1 Tokushima

## 初日前 雨から生まれるもの

田も山も霧の中 窓から聞こえる鳥の声  
澄んでいながら潤って 水のように流れ入る  
これが小雨の日というものか

雨から、生まれるものがちがう。

民宿つしま屋の2階の窓辺から、霧にかすむ外をながめれば、今朝に東京を発って徳島に入っただけで、こんなにも雨の日の音と香りがちがうことに驚く。

部屋には、一番霊山寺の近くのお店で買ってきたばかりのお遍路グッズが並んでいる。お杖は壁に立てかけられ、その横に菅笠、ビニールから出して折り畳まれたままの白衣、紫の袈裟（けさ）、手甲、数珠、納め札などが置かれている。

「これからの二ヶ月間、これを着るんだね」

夫はうれしそうだ。買い物をする前は、

「観光気分にはまってはいけない」

ひとりて息巻いていたのに、お店に入るといろいろなものを手に取りだした。日本に住んで8年とはいえ、やはり珍しいのだろう。お店のお兄さんは、

「外人さんですか～。アメリカ？ こりゃ、肩幅が広いやあ」

一大事とばかりに店の奥へと消えてしまったが、しばらくすると3Lの白衣を持ってもどってきた。買わないはずだったのに、試着してピッタリ合うと、

「ナイス！」「はい、ベリーナイスです」

お兄さんといっしょに喜んで購入、その勢いに乗ってまさかの菅笠まで買った。

遍路道への興味から下調べをしていたことは知っていたけれど、日本人でさえ二の足を踏みそうな世界へ、こうも自然に入っていくとは……。

こっちは日本語が初級レベルの彼のため、通訳として重い腰を上げたにすぎない。

1980年代の20代後半に精神世界に触れてみて、逆に日常生活に秘められた可能性に気がついたから、宗教がかった場所など来たくなかった。ミイラ取りがミイラになってしまった人たちもいそうで、時間のムダなような気がしてならない。

今は日常の中で、いったいどんな意識が勝手に入ってきて自分をコントロールしているのかを見るほうが、よほどダイナミックで役に立つ精神活動に思える。

聖地も、その意味すらわからない。単なる開発ビジネスに見える。

1980年代に、アメリカのアリゾナ州のセドナに、九ヶ月ぐらい住んだことがある。ベルロックという岩山の前のアパートで、山を見ながらひとりて本を読んでいた。

窓から見える自然は、レンガ色の岩だらけ。そこを照らす光は、まるで別の惑星のものよう。光の玉の中にいながら、同時に海の底にいるような感じがした。

さすがに聖地と呼ばれるだけあって、特別な場所だったのかもしれない。

でも、そのあとがいけない。セドナの人気はうなぎ上りだったらしく、6年後に観光で行ってみれば、聖地のはずなのにショッピングセンターができていた。アパートがあった所にはホテルが建てられ、そのほかの土地にはぎっしりと高級住宅がつまっていて、全く別な場所に見えた。

あれでは不動産の価値が上がって、固定資産税が暴騰したにちがいない。前々から住んでいた地元の人たちは、もう住めないのではないだろうか。

四国の遍路道は、セドナどころじゃない。空海は別としても、人間がからんだ長い歴史がある。行倒れの靈魂がウヨウヨいるようで、こ・わ・い。

それでも四国とは、一度だけ縁があった。数年前に通訳として、福岡正信氏を訪ねたのだった。

日本の民間人としては海外で一番有名な人で、自然農法を提唱し、「わら一本の革命」の著者ということだけを聞いて、2泊3日のインタビューに同行した。

めまいを起こすほど農業英語を勉強していけば、氏が話すことは農業のことではなかった。心の世界のことだった……。

「あんたがたは、自分が野菜を育てていると思っているだろう。それはちがう。育てるのは自然だ」

福岡氏の自然農法は、砂漠であろうが畑であろうが、ただ種と粘土をまぜて作ったお団子をまくことで知られていた。心の中を外に現すことであり、心に悟りのような確信、信念があってこそその農法のようなものだった。

ところが、たいていの人は五感の世界で見える自然現象を「自然」と思っている。そういう人が粘土団子をまいて、自分の農法の教えを根本的にまちがって実践していることに困惑されていた。

田んぼやみかん畑、お山にも案内してくださったが、あれは愛媛県じゃなかったか？ 遍路道は、その近くを通っているのだろうか？ ものすごく緊張していたので、福岡氏のご自宅のまわりの様子など全く覚えていない。

買い物のあと、遍路は明日からということにして、民宿でゆっくりした。ほかにも遍路がいたけれど、夕食時はみな黙って食べているだけだった。

民宿には、客のほうか宿の人に気を使うという印象があったが、つしま屋はとても感じがいい。夜、おかみさんから手作りのおさい銭入れを頂いた。懐かしいような色鮮やかな黄色い布でできていて、カエルの絵がプリントされていた。

中には五円玉が入っていて、

「お接待です」

おかみさんが言った。四国では「お接待」という言葉は、独自の進化を遂げているらしい。人生最初の公式なお接待となったおさい銭入れを握ると、

「これから、何かが始まるのかな……？」

手のひらで、柔らかな布の感触を楽しんだ。

夜にはちゃぶ台の上で、100枚の納め札を英語と日本語で書きはじめた。住所、年齢、氏名まではよかったが、「願意」のところで手が止まった。納め札によっては願意の項目はないらしいが、私たちが買ったものにはあった。

これには困った。考えてこなかった。へたに書いて、その願いにとらわれてしまうのはイヤだ。結局、ひらめきをとって「世界平和」とすることにした。

緑茶をすすりながら書きはじめたのはいいけれど、20分も同じ文字を書いていたら、手が痛くなってきて、字もぐしゃぐしゃになった。

「あ～、ひどい。読めたもんじゃない」

ペンを置いて畳の上に大の字になると、夫が私の納め札をのぞきこんだ。

「年齢のところを7才と書いて、あとはひらがなで書いたら？」

## Day 01 四国とチベット

衣装をつけて互いを見れば、ズボンとTシャツこそは速乾性のある登山用のものだが、ほかは白衣、菅笠、お杖、袈裟と、完全にテキスト通りの姿をしている。我が人生の中でこんな格好をする日がこようとは、思ってもみなかった。

玄関へ下りていけば、おかみさんが待っていた。

「どうぞ、お気をつけて」

笑顔で気持ちよく見送られ、

「お世話になりました」

できたてホヤホヤの遍路が二人、お辞儀をして玄関を出れば、「あっ！」

春霞 道の向こうの靈山寺  
ポッと浮かんで春らん漫  
門前の桜の花びらは  
散りながらでも咲かんとばかりに  
虚無僧の 笠に 衣に 降りそそぐ

この男、いったいどの時代から出てきたのか。若い虚無僧がひとり、門前に立って尺八を吹いていた。もしかしたら宮本武蔵なんかも、そこらを歩いてはいないだろうか。

虚無僧の笠は、私たちの笠とは全くちがう。深い編み笠で、顔の表情が見えないところが、また想像をかきたてる。朝霧の中にかすんで見える黒い僧衣に、降りそそぐ淡いピンクの花風、スローな尺八の低い音……。

あ～、初日の朝にしてはできすぎなぐらい、完璧な1枚の絵だった。

その絵の中へ遍路として静かに足を踏みだせば、白衣と笠だけでなく、とくに手甲をつけた手に木のお杖を握り、ついて歩くと聞こえる音が、数歩歩き出しただけの私の

中に一気に強い旅情を呼びおこした。なんか、いい……。

感動のような胸のときめきは、花吹雪の中に立つ虚無僧へ向けてどんどん大きくなり、その横をわざと自分もうつむき加減になって通りすぎたときに、ついにクライマックスに達した。

それは、本当にクライマックスだった。

そのあとは、一瞬にしてかき消えた。境内は、まさに娑婆そのもの。せわしく動く遍路で混みあい、横の駐車場からは大型バスの出入りの音が聞こえ、排気ガスの臭いが漂い、お堂に入っては言葉を失った。

本堂の前面が、なんとおみやげ屋になっていた。お守りやお札といっしょに、漬け物まである。薄暗い中を、おばあさん遍路がせこせこと動いて、あーだ、こーだと言っては漬け物に手を伸ばし、その声や咳が、ほこりが舞う堂内に反響していた。

「こんなはずがない……」

仮にも遍路なんだから、お経でも読まなければと思っていたが、とんでもない。ここはプロの集まりか？ 初心者マークの遍路は経本を持ってウロウロするばかりで、結局は読めずに、逃げるように大師堂へ行った。

お堂の前では20人ぐらいの団体が列をなし、木魚を叩き、鈴の音をシャンシャンさせながら、特異なクセのある調子でお経を読んでいた。最初は何を読んでいるのかさえわからなかったが、最後に「はんにゃーしんぎょー」と聞こえたときには、ギョツとした。般若心経を読んでいたとは、露ほどにも思わなかった。

彼らが去ったあと、おもちゃの兵隊さんのように二人してお堂の前に足をそろえて前進し、頭から落ちていくようなお辞儀をしたものの、あの合唱のあと……、すっかり圧倒されていた。

それでも「南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんごう）」という「御宝号」というものを、生まれて初めて唱えてみた。が、3回唱えるうちに、請求書に書かれた予想外の高額な値を読むかのように、尻上がりの口調になっていった。

「これは、いったいどういう意味だ？」

横で手を合わせる夫を見れば、彼は笑いをこらえるように言った。

「いいから、いいから」(Never mind.)

一番霊山寺は、遍路道のお寺のイメージからはほど遠かったが、自分たちも負けず劣らず、理想的な遍路像からはかけ離れての出発となった。

まだお店が閉まっている静かな商店街を抜け、1.4キロ歩いて二番極楽寺の入口に着くと、夏みかんのお接待を頂いた。いや、八朔か？ 区別がつかない……。

境内には空海が植えたと言われる霊木があり、しぼり込まれたような幹をしていて、お寺もきれいだった。本堂では、団体遍路がまた独特な調子で般若心経を読んでいた。困った。あんな風には、とても読めない。

それでも、ここから意を決してお経を読むことにした。私は日本語版、夫が英語版の経本を手にし、団体遍路が終わるとお堂の前に前進した。

「オーケー？」(OK?)

「もちろん」(No problem.)

勇ましかったのは、このかけ声だけ。あとは、リスが盗んだ木の実をまわりを気にしながら遠慮げみにかじっているように、細々と読みはじめた。

目で字を追いながら、初めて重大なことに気がついた。お経の本に、読みがながふっていない。どこで、どう切ればいいのかわからない。第一、お経の意味がわからない。漢字で書かれているけれど、日本語じゃないじゃないか……。

半ば吹き出しそうになりながら読みつづけ、初めての般若心経の読経が終わったときには、二人とも異常に疲れていた。

「アンビリーバボー！」

夫が時計を見て、目を疑った。3分もたっていないかった。

あまりに疲れたので、このあとは本堂だけでお経をあげ、大師堂では御宝号だけを唱えることにした。御宝号は、空海を呼びおこすためのようなものらしいから、これさえ読みあげれば当座はしのげるかな。

三番金泉寺へ向かって町中を歩いていると、鈴の音が聞こえてきた。元気な遍路であることは、背後から歩いてくるにもかかわらず十分にわかるような軽快な音だった。

果たして数分後に、50代後半の女性が横を通りすぎた。

「おはようございます」

「おはようございます。ご夫婦？」

「はい。お一人ですか？ 怖くありません？」

「ぜ～んぜん。もう、楽しくてねえ～。一人じゃ寂しいかと思ったけれど、とんでもない。21歳のときに結婚してから、一人で考える時間なんてなかったから、もう幸せ！」

子どもが大学に入ったのをきっかけに、かねてから憧れていた遍路の旅に出たという。

「友人が40代のときに50日でまわったから、私は60日ぐらいかかるかしら？ 夫は、家で留守番よ。退職するのを待ってられなくて、一人で来ちゃったわ。あなた、お子さんは？」

「まだなんです。36歳なんですけど」

「早く生んだほうがいいわよ。子どもを生むのは、女の義務ですからね」

上から下まで真っ白なお遍路さんは、背筋をピンと伸ばし、鈴の音とともに遠ざかっていった。その勇ましい姿を、あっけにとられながら見つめた。

「あの……まさか義務で、お子さんを産んだんですか？」

三番金泉寺の鐘撞き堂に腰かけていると、後ろの山からホトトギスの声が聞こえてきた。お経というものは、あの鳥のさえずりのように歌えないものかなあ？

四番大日寺までの道は、丘を上り下りして車道を離れて歩き、みかん類が落ちている畑の横を過ぎた。果物が落ちているということが、買うことに慣れた自分にはどうも合点がいけないまま歩き続ければ、アヤメの花が咲き、川辺はセイタカアワダチソウで埋められていた。

「やっぱり、東京を出てきてよかった」

夫も最初はがっかりしたが、この景色を見てやっと元気が出てきたようだ。その証拠に、

橋をわたるとき私がお杖をついていないか、チェックを入れるようになった。

空海が別格八番の十夜ヶ橋あたりで一夜の宿をえられず、橋の下で寒い夜を過ごしたとされ、以来、空海の眠りを妨げないように、橋の上ではお杖をつかない風習が生まれたらしい。当然、空海とともに歩く「同行二人」の遍路が、橋の上でお杖をつくなど無礼千万とされている。

しかし疲れてくると、そんなことは忘れる。ど～でもよくなる。

「へんな決まりよ。橋の上を走る車のほうが、よっぽどうるさいじゃない。自転車はどうなのよ？ 中途半端な決まりもいいところだわ」

いちいちチェックされたんじゃ、たまらん！とばかりに言えば、「遍路道が単なるウォーキングコースじゃなくて、空海といっしょに歩く道だってことを、絶えず遍路に思い出させるためだよ。お杖をつかないのは、空海のためという以上に、遍路自身のためなんだよ」

う～ん、説得力のある答え。「自分のため」と言われたら、考えないでもない。

3キロぐらい歩くと、田舎道のど真ん中にある愛染院に着いた。三番金泉寺の奥の院で、大きなワラジがあり、また小さなワラジが祠にたくさん奉納されていたので、足の病気が治るお寺であることはすぐにわかった。

番犬が1匹、気持ちよさそうにお腹をだして寝ていたが、私たちが境内の隅で菓子パンを食べはじめると、昼寝をやめてやってきた。中型の雑種のようなのだ。

名前は「りこちゃん」といい、お寺のおばさんの話によると、賢そうな顔をしているだけでなく、遍路や子どもには絶対に吠えないという。

「わかるよ。あなたこそが菩薩だよ」

感謝の気持ちをこめてお腹をかいてあげれば、りこ菩薩様の目は、私のもう片方の手にあったパンだけを見つめていた。

四番大日寺はかなり古く、アンティークというか。お堂には、子どものよだれかけや写真がベタペタとはられて、本堂と大師堂をつなぐ回廊には、33体のこれまたやけに古い観音像が、ほこりをかぶって並んでいた。なんで、磨かないのだろう？

お寺が坂の上にあるせいか、タクシーで乗りつけてくる遍路が多く、寺の入口には絶えず砂ぼこりが舞っていた。そこにポツンと一人で立っていたおじさんが、私たちを見ると案内役をかってでた。

定年後はひまだから、自転車で遍路を案内しているらしい。破れかけた帽子に作業着のようなシャツ、ズボンと、畑仕事の最中に手を止めてやってきたような姿だった。とても純朴そうな表情をしていた。

五番地藏寺までの道すがら、おじさんは自転車を手で引きながら、実によくしゃべり、朗らかだった。高速道路をなぜか自転車で逆走してしまい、パトカーに捕まった話などをしながら、自分で自分のしたことがおかしくてたまらないといった感じで吹き出していた。

こうして笑い話のようで、実は冷や汗もののお話をしながら地藏寺に着けば、また二番へ

の道で私たちを追い越していった一人歩きの女性がいた。私たちが別格や番外も行く予定だと言うと、彼女は驚いた。

「はじめは無理よ。私は、なんとか50日ぐらいでまわれればいいわ。山道は避けて、国道に沿って歩くわ。ほ〜んと、楽しいもの」

ところが、私たちが自転車のおじさんといっしょだとわかると、それまで晴れ晴れとしていた顔に、ヒステリックな恐怖と不快の表情が浮かんだ。私をわきに寄せ、おじさんに背を向けて言った。

「あの人、私にもついてこようとしたのよ。おかしいかもしれないから、まいたら？」

なぜか私の手におにぎりをひとつ握らせると、子どもを有名校に入れたというお母さんは、タッタタッタと歩いて行ってしまった。おにぎりを持つ手は彼女の母性を感じつつも、心のほうは急に曇りはじめた。

「おじさんは、へんな人なんだろうか？」

それまでせっかく楽しく歩いていたのに、妄想が頭を巡りはじめ、私はあまりしゃべらなくなってしまった。それが、おじさんに伝わったのだろう。五番のあと少しだけ歩くと、

「お昼は、ことぶき食堂で食べるといいよ」

私の目をのぞき込むようにして言うと、自転車を引いて来た道をノロノロともどっていった。おじさんの顔には、もう笑顔はなかった。

ことぶき食堂でランチをとりながら、一人歩きのお母さん遍路から受けた忠告を夫に話してみた。

「初日は、落第だね」

怒ったようにあきれられた。

「一人歩きならともかく、夫婦で、しかも片方は180センチを超えた男なのに、あのおじさんにいったい何ができると思うんだよ」

空海も、さぞや私のことを情けなく思ったことだろう。申し訳ありませんでした、おじさん。そして、ありがとうございます。また、ことぶき食堂の中華は、おいしかったです。

(おじさんの名誉のために書いておくが、のちに六十一番香園寺で、おじさんに案内してもらったという別の夫婦遍路に会った。とても親切な人で、危ない人なんかではなかったのだった。きっと多くの遍路が、この人に案内をしてもらってきたにちがいない。)

四国には、空海ゆかりの八十八ヶ所のほかに、別格霊場として二十ヶ寺がある。こちらでも空海ゆかりの霊場らしいが、初心者マークの遍路は行かない。ほとんどのお寺が、八十八ヶ所を最短でつなぐ遍路道から大きくはずれるからだ。

別格霊場一番の大山寺もそうで、五番大日寺から6.2キロもあり、標高およそ450メートルのところにある。

初日ゆえの気楽さか、先のことも考えずに山道を登っていけば、「あっ！」とばかりに仁王門が突然に現れた。そこからは竹林を抜ける長〜い苔むした階段が続いていて、少し暗いトンネルのような階段の上には、さらにもうひとつの門があった。美しい趣のある風景だった。

途中で何回も腰かけて休みながら階段を登りきると、山を背に古いお堂が並んでいた。なんとも、閑静だ。境内には、しだれ桜のような新緑こぼれるイチヨウの巨木があった。後ろの竹林からは、ホトトギスの声がした。春だよ。春！

黙って鳥のさえずりを聞きながら、イチヨウの巨木をながめていたいお寺だった。

ただ、日本中どこにでもあると思っていたものが、ここにはない。まさかと思って、納経所で聞いた。

「自動販売機は、どこでしょうか？」

「ありません」

びっくりした～。ポリシーのあるお寺なのだろう。

仕方なく、公園の子どものように水飲み場の水を飲んで休んでいると、納経所のお坊さんがやってきた。なんとジュースとカロリーメイトのお接待を頂き、夫がアメリカ人とわかるとまたもどってきて、今度は英語版の徳島二十三ヶ寺に関する本を夫にお接待して、説明までしてくださった。本当に、ここまで登ってきてよかった。元気が出た。

コンクリートの道のせいだろうか、六番安楽寺への道では足が急に痛みだした。山登りの筋肉痛とはちがって、かかとかから頭まで一直線に骨が痛んだ。経験したことのない痛みだったので、5時すぎに安楽寺の宿坊に着くと、二人とも畳の上に座ってともかく足を伸ばした。

でも、初日から悲鳴をあげそうな遍路にとって、安楽寺とはこのこと。300人収容できるきれいな施設で、なんとお風呂が温泉だった。一休みすると、急いでお風呂に飛び込んだ。ほっ！柔らかな湯が、足にきく～。

部屋は旧館の2階で、お風呂上がりに旅人気分になって欄干から下を見れば、団体の大型バスが見えた。軒下では、ツバメの夫婦がかわいく並んで休んでいた。部屋という部屋からは、テレビの音がする。みんなが同じ天気予報を見ていて、音声がだぶっているのがおかしい。

「あの～、失礼します」

ふすまを細く開けて、となりの夫婦遍路がニコニコ顔をのぞかせた。私たちが英語でしゃべっていたから、気になったという。60代ぐらいの夫婦で、一ヶ月かけて歩けるところまで歩く予定らしいが、やはりもう足が痛いと言った。

ふすまひとつ隔てて、他人と眠る宿かぁ。昭和だ、昭和！自分のしゃべる声を、いつもよりしっかりと意識して聞いている自分がある。この感覚は、久しぶりだ。

でも、旅行気分になんかなってられない。夕食が終わると、迷わず大きな箱を事務所からもらってきた。

「どうして、なぜ、こんなものを持ってきた？」

ウォークマン、文庫本……、どんどん箱に入れた。明日、ここから宅急便で東京に送り返す。昨日のこととはいえ、東京を発つときにいったい何を考えていたのだろうか？しかし、初日にしてこのぎまとは……。

このあと足を引きずるようにして、夜のお勤めが行われるお堂に行った。初めての経験だったので、どうなることかと緊張していけば、始まる前からみんながコクリコクリと座ったまま居眠りをしていた。おかしなことに、歩きの遍路だけでなく、バス遍路の人た

ちも同じように疲れているようだった。みごとに年配の人たちばかりだ。

私たちは正座などできる状態ではなく、足をくずして後ろのほうに座り、「今夜は長～い夜になりそうだな」と、覚悟をした。

ところが、音の力とはこんなにすばらしいものなのか。僧侶たちの低い声の読経が進むにつれて、心に力が湧いてきた。お護摩もたかれた。

夫は、若い僧侶たちが儀式の最中に手印を結びはじめると、腰を浮かせて手の動きをじっと見つめた。これから、こういう夜を何日すごすのだろうか？

目が覚めるようなお勤めが終わると、みんなが一斉に立ち上がった。

「あ～」「う、う～」

歩きの遍路だけが、筋肉痛から悲痛なうめき声をあちこちであげたので、堂内に笑いがこぼれた。

夜、布団の中で夫が言った。

「もしチベットが豊かだったら、チベットの僧院は、きっとこのお寺のようになっていたかもしれないな」

「そうかもしれないね。懐かしいねえ」

部屋の天井を見つめながら、チベットのことを思い出した。1993年、チベットを二ヶ月間旅した。かろうじて中国軍による全壊を免れたお堂は、どこも古くて薄暗く、高い天井から差しこんでくる細い光の中で、砂ぼこりが舞っていた。

慣れないものにとっては、鼻をつまみたくなるほど強いバター茶の臭いの中で、レンガ色の僧衣をきた僧侶たちが、魅惑的な低い声でお経を読んでいることもあった。幼い少年から70歳ぐらいまで、僧侶の年齢はさまざまだった。

「こういう人生もあるんだなあ」

自分の人生観の小ささを、つくづく感じた。

僧侶たちは儀式のとき、今夜のようにいろいろな手印を結んでいた。手が花となり、いろいろな花がなめらかな動きの中で開いては閉じ、また開いては閉じた。花の中にある宝玉を、転がしているかのようだった。

夏河、ラサ、シガチェ、ギャンチェ……、あの時に会った僧侶たちは、今も無事だろうか。国の状況にもかかわらず、好奇心が強く、生き生きとしていた。夫のまわりに集まっては、カメラを見たり、英語で質問をしてきた。

チベット族の自治州の夏河では、村はずれの標高が高くて木も生えていないような放牧地で、ひとりの僧侶に出会った。小屋のようなお堂に一人で住んでいて、かなりの老齢だった。

彼は、私たちを一問しかないその小屋に招きいれ、雑草で作ったようなお茶を振るまいながら笑顔をみせていた。しかし、やがて壁にかけられたダライラマの小さく色あせた写真を指すと、声を殺して涙を流したのだった。

## Day 02 おばあさんと桜

もっと話しかけてください 怪しい者ではありません  
見ず知らずの人から 安心して話しかけられると  
うれしいんです こちらも安心するんです

受付の若いお坊さんは、ガラクタをつめた私たちの段ボール箱を、それはごく自然に受けつけてくれた。どうやら初日にして切羽詰まった遍路は、ほかにも結構いるようだ。テントも送り返してしまったので、宿がとれなければ野宿をしなければいけなくなったし、2日目にして天候と健康への不安で心が曇りはじめたけれど、さすがに足は軽くなった。もう翼が生えたように、七番十楽寺へと歩いていった。

門のところではツバメが巣を作っていて、その上にある部屋のような空間には、護摩用の小さな礼拝堂があった。

おかしなことだ。子どもの頃に作ったお気に入りの秘密の空間と、こうした小さな礼拝堂は、全く同じように感じる。幼児期に感じた神秘の世界。その延長線上に宗教が生まれたなんて言ったら、お坊さんたち、怒るだろうなあ。でも、そうとしか思えない。

お参りをすませたとき、大型バス2台からぞくぞくと遍路が降りてきた。そのあとにガイドと運転手が、数十冊もの納経帳が入った袋を両腕と両肩からぶら下げて、納経所へ向かっていった。

「まずい！」

夫も納経帳を持って爆走し、やっともどつてくると、

「あの人たちの納経帳、真っ赤、本当に真っ赤だった。いったい何回、遍路をしているんだろう？」

眉間に、しわをよせた。これまで知らなかった日本の一面を見てしまったのか。かくいう私も、知らなかった……。

そんなに遍路道をまわって、おもしろいのだろうか？ しかも、バスだよ。

八番熊谷寺は、長い参道が続く落ち着きのあるいいお寺だった。境内に入ると、夫はすぐに鐘撞き堂の2階へと上がっていった。

アメリカ人の友人夫婦が四年前の1994年に遍路をしたとき、ここで野宿をさせてもらった。当時、日本に住んでいた二人は、日本の友人から遍路道の話聞いて、新婚旅行として遍路道を歩いてまわりはじめた。それが、夫が遍路道に関心をもったきっかけでもあった。

夫は、最初は彼らのため、次に私たちのために鐘をついた。そのとき鐘の音が響く谷間に、雨が降りはじめた。まわりの桜の花の色が、小雨の中、鮮やかに浮かび上がってくるようだった。

鐘撞き堂の2階からは、すぐ下に本堂が見えた。団体の遍路がやってきて、「線香だ」、「ロウソクだ」と最初はざわざわしていたが、そのうちに整列してお経を読みはじめた。小雨の中、すべてがしっとりと流れていくようだった。

その様子を黙って見下ろしていると、下から傘をさした中年の写真家がカメラを取りだし、夫にポーズをとってくれるように頼んできた。

「ぜひ、笠もかぶってください。ぜひ、ぜひ、よろしく」

写真家同士のよしみか、彼は笑って引き受け、モデルの役を終えると私たちも本堂へと下りていった。リュックを置く場所を探していると、

「そこに、荷物を置いていきなさい」

優しい声がした。それだけで心がなごむような言い方だったので、驚いて振りむけば、おばあさんが赤ちゃんの体を拭く母親のようにロウソク立てを拭いていた。汚れを落とすような荒さが全くない。布を使って、ロウソク立てに話しかけているような感じだった。

あれが、「拭き掃除」というものかも……。

お参りをしているうちに、雨が上がった。気持ちよく境内を出て、ポツンと畑の中にある山門の方へ歩いていると、桜の花が続く道の先からスクーターに乗ったおばあさんが向かってきた。まるで別次元の空間の窓が開いて、そこから忽然と現れたようなスクーターだった。

山門の下ですれちがいそうになると、おばあさんも私たちもピタリと止まった。

「おはようございます」

「一番茶をいれてきたんよ。紫蘇ジュースにするか？ 手作りじゃけんね」

手振りもつけて私たちを引き止めると、スクーターの荷台にあった風呂敷包みを持ってきて、山門の下に広げはじめた。もしかしたら、これもお接待というものなのだろうか？ 戸惑いながらも、おばあさんからお茶を頂いた。

「ほら、サツマイモもある。地なりっていうんよ。早い者勝ちだ。ご主人、アメリカ人？ えらいな～」

どんどんいろいろなものを出して見せてくれたが、突然、手を止めた。

「そうだ、いいもの見せたらか！」

私たちの返事も待たずにスクーターに乗ると、来た道をもどっていった。

「本当に、もどってくるのだろうか？ いつもどってくるのだろうか？」

彼女が消えた方向をサツマイモをかじりながら見ていると、馬が突進してくるかのごとく、またスクーターが向かってきた。

おばあさんは、新たな風呂敷包みを荷台から取りだした。中身は額に入った1枚の写真で、たくさんの遍路と並んでおばあさんも写っていた。

へんろみち保存協会が率いる30人の遍路が、家の前を通過したときに手作りのお雑煮をお接待したので、協会の宮崎氏からお礼として贈られたのだという。

「わしの宝物だ」

おばあさんは、両手でしっかりと額を握りながら言った。

「あと、これもな。この先、必要になるじゃろからな」

風呂敷の中から、手作りのワラジを取りだした。写真に写っている30人の遍路にもあげたという。ワラジなんて、手に取ってみたのは初めてだ。

「わぁ～、ありがとうございます」

ただ大喜びして、必要になる理由も聞かずに頂いた。

「足がわる～て、八番、九番ぐらいしか行けんから、7、8年前からこうして接待してるねん。みんながくれる納め札を箱に入れて、毎日、拝んでるよー」

おばあさんの明るさとパワーに圧倒されていた私たちは、我に返ったように納め札を差し出した。

「バスでまわる遍路は、どうでもいい。歩きの人にだけ、こうして接待しちよるわ。今日は雨で畑の仕事にならんから、接待することにしたんねん。あんたら、ついとるな。アッハッハ！」

お礼を言って歩き出し、しばらくして山門の方を振りかえると、桜の花の下に彼女はもういなかった。夫が、笑って言った。

「もしかして……空海？」

十番切幡寺は覚えていないが、階段は覚えている。333段も登ったからだ。

「盗まれてもいいから、どうしてリュックを下に置いてこなかったんだろう」

登りながら、自分たちの知恵のなさに不機嫌になっていた。

宿までの道はコンクリート道だったので、果てしなく長く感じた。足がまた痛みだして、ちょこちょこお店に寄ってはおやつを買って店の外で食べた。ベンチがなければ、リュックの上に座って食べた。ヤケクソになって地べたに座る日も、そう遠くないように思える。

本当は明日の十二番焼山寺への山道を考えて、十一番藤井寺の近くの旅館に泊まりたかった。が、満員で泊まれず、十一番札所に電話して、

「寝袋を持っています。境内で、野宿をさせていただきませんか？」

勇気をふりしぼって聞いてみた。でも、あっさりとは断られてしまい、ビジネスホテルオイケに泊まることになったのだが、これもまた、いいご縁だった。

ビジネスホテルとあるから、遍路を煙たがるかもしれないと思って怖々と入っていけば、着いてすぐにコーヒーを食堂でごちそうになった。おかみさんから夫への、ありがたい心遣いだった。

豆を挽いて入れてくれたコーヒーを大事にすするように飲んでいると、おかみさんが言った。

「今日、コンビニの前で、アイスクリームを食べていなかった？」

夕方に、車で私たちの前を通過したらしい。宿泊の予約は私の日本名で入れるので、そのときは私たち夫婦が泊まるなんて思いもしなかったにちがいない。それでいて私たちが視界に入ったということは、アイスクリームはもとより、やっぱり白人遍路が目立つということなのだろうか。

40代ぐらいのおかみさんは気さくなハイカラの人で、私たちの不安はすぐに消えてしまった。夕飯のオムレツの、まあおいしかったこと！

「東京に帰ろうかな……」

実は、2日目にしてもうそんな考えが、頭をよぎり始めていた。仕事をやめて、貯金を使って歩いたあげく、単なる寺巡りに終わったらどうしよう。足の痛い思いをして、お寺を

見てまわるなんてバカげている。

お経を読んでいれば団体がどっと押し寄せて、こちらのお経が終わらない前から鈴をガンガン鳴らして大合唱を始め、おさい銭を人の頭越しにビュンビュン投げる。霊にとりつかれた、カルト集団みたいな人たちもいる。お寺によっては、テレビを横目で盗み見ながら納経する。

費用も半端じゃない。宿代とおさい銭、納経代、食費と、最低でも一人で8000円ぐらいかかる。宿によっては、1万円の日もあるかもしれない。二人で1日2万円もかかって、60日かけてまわったら、120万円かかる。

ヨーロッパ旅行ができるじゃないか……。正直、今朝からこんなことを考えて悶々としていた。

でも、八幡熊谷寺でお接待を頂いたおばあさんや、このホテルのおかみさんのように、自分たちが遍路というだけで、見知らぬ人たちが気さくに話しかけてきて、自分も平気で受け答えしているという不思議さ。道ばたでは、「ごくろうさん」と励ましてくれる人びとがいる日本。こんな一面があったとは……。

夜、布団の中で、今日歩いた道を朝から順番に思い出してみた。

「ねえ、九番って覚えている？ どんなお寺だったっけ？」

九幡法輪寺がどうしても思い出せない。信じられない。今朝行っただけなのに。

「境内に、大きな中庭があったよ」

「中庭？ 私、そこで何かした？」

「ベンチに座っていたよ」

「ベンチ？」

「それから、お寺を出た向かいの店で、うどんを食べたな」

「あ～、あそこかあ」

## Day 04 シャガの道

昨夜もずっと雨音が聞こえたが、朝起きて窓を開ければ、鳥の声が部屋にこぼれるように入ってきた。霧だけが山肌を流れ、その白い流れの中で、鳥たちが鳴いていた。

清々しい山の朝のお参りとなった。朝霧の中、一人でベンチに座って納経所へ行った夫を待っていると、昨夜、となりの部屋に泊まっていた女性遍路たちがお参りにやってきた。

昨日から思っていたのだが、ひとは遍路の姿をしていながらも、どこか目立つ。今日は、靴下はヒョウ柄、パンツはクロ。頭には、首の後ろが隠れるサンバイザーをかぶっていた。

「おはようございます。昨日はあの後、大丈夫でした？ 降りましたよね～」

自分も、娘気分になって話しかけた。

「はい、もう、まいりました。途中で、泣きたくなりました。あの、お経を読まれるんですか？ 私たちは、まだ読んだことがないんです」

「空海のこと、あまり知らないんです。ただ、なんとなく来ちゃったんです」

二人とも屈托のない笑顔を浮かべ、生き生きしている。

「私も、空海の別名が弘法大師ってことだけ。みんな、そんなもんでしょう」

そう言いながらあのオヤジのことが頭をよぎり、空海を知らない人のほうが、むしろ邪気がなくていいとさえ思った。

「そのサンバイザーって、遍路にはものすごく便利じゃないかしら。首が日焼けしないし、虫よけにもなりそうね」

私がジロジロ見ながら言うと、ショートヘアのかわいい顔が、ますますニコニコしてきた。

「そう言ってもらえると、うれしいです。これでも私、それぞれのアイテムは流行のものを身につけているんです。なのに、全部をいっしょにすると、なぜかおばさんに見えるんです。徳島の子どもに、道々、笑われているのがわかるんです」

そうだったのかあ。それが、彼女の姿が醸し出す独特な雰囲気秘密だったのかあ。友人のほうがジーンズにTシャツだから、尚更、浮きあがって見えたのだ。彼女は東京からバイクで四国入りし、歩き通す予定でいるが、友人のほうは徳島が終わったら東京にもどるといふ。

本堂へと二人が去っていくと、夫が見知らぬ男性と親しげに話しながらもどってきた。二人ともニコニコしてこっちを見ている。

「奥さんですか。や～、どうもありがとうございます」

「えっ？」

一瞬、目を疑った。山道を爆走していった、あの不動明王だ。それが今、知的で笑顔いっぱいのおばさんのお顔を、目の前に立っている……。

「ご主人が、妻の大切な鈴を拾ってくださったんです。ありがたいことです。思い出のある鈴なんです。妻は、落としたことにも気づいていなかったようで」

こんな明るい笑顔の紳士だったなんて……。

恵比寿様は、言葉を失っている私のお礼のジュースを置くと、奥さんの方へ早歩きで去っていった。朝から、もうエンジン全開だ。どんな奥さんかと彼の姿を目で追えば、もちろんあの後を猛スピードで追っていった感じのいい女性だった。

すぐに夫に聞いた。

「鈴って？」

「昨日の急坂で、拾ったんだよ。カニといっしょに流れてきたから」

「どうして、あの奥さんのものだってわかったの？」

「通りすぎたときに、鈴の音がしただろう」

「ふくらはぎしか、覚えていない……」

「何いってんだよ。ぼくは炭酸飲料は飲まないから、あげるよ」

「2本は、重たいよ」

もらったジュースを両手に持ったままあたりを見回すと、どこから現れたのか、あのおじいさんと失礼なオヤジが、遠くのベンチに座っていた。やっぱりこの寺に、昨夜は泊ま

ったようだった。

ジュースを1本だけを持つと、自然と立ち上がった。自分が何をしようとしているのか、よくわからなかった。墓穴を掘ることになるのではないかと心配になりながらも、体のほうが、ある意志に引きずられるように二人へ向かっていった。

「おはようございます」

笑顔を浮かべながらおじいさんに挨拶をすると、横に座った。それも、横の失礼なオヤジの表情が見られるように浅く座った。ジュースを、おじいさんに献上するように差し出した。

「もらいものですが、どうぞ。今日も、のどが渇くと思いますから」

「やあ～、どうもありがとうございます。本当に、昨日は長かったですね」

この人はホント、りっぱだ。年下の私にも、丁寧語を使ってくる。

「ぬれましたか？」

「はい。びっしょりですよ。このあとは、タクシーを使ってまわることにしました」

「まあ、そうですか。(やった！ これでもう、オヤジに会うことはない) でも、ここまで無事に着いて何よりでした」

そのとき、チラッと「失礼なオヤジ」を見た。両ひざを包むように置いてあった両手が、握りこぶしに変わっていった。座り心地が悪いのか、背筋をピンと伸ばしたままモジモジし始めた。血管が、顔に浮かんでくるのではないかと思われるぐらい真っ正面をにらみ、絶対にこちらを見まいとしていたが、

「うう～ん」

ついにへんな咳払いをした。案の定、私に投げつけたくとも、その言葉が見つからないのだ。そりゃ、そうだろう。まさか「俺のジュースはどこだ」とは言えまい。

「どうぞ、お気をつけて」

立ち上がってお辞儀をすると、私はその場を離れた。口元から顔中に、薄笑いが広がっていく……。女子社員的な小賢しいリベンジだが、こういう小さなことが、ああいう人間には結構こたえることは知っている。この年になるまで、だてにオヤジたちと仕事をしてきたわけじゃない。

ただ、当然のここのように、

「遍路道に来てまで、なにをやってんだか……」

愚かさをとがめようとする自分も出てきた。だんだんと顔を曇らせ、下を向かせようとした。

ところが突然に、全く突然に、別な自分が胸の奥から突き出てきて言い放った。

「私が今ここにいられるのは、生きているのは、両親の愛のおかげなんです。私は、親の愛でここまで運ばれ、生きているんです。その後ろには祖父母もあって、こうして歩いていられるんです。

その愛にかけて、『いい一生を送ってほしい』という彼らの願いにかけて、私は、私を大切に生きなければいけないんです。他人の心の泥なんか、受けるわけにはいきません！」

自分で、自分に驚いた。初めて聞いた声なき声だった。

「そうなんだあ」

胸のあたりに揺らぎないものを感じながら、事の始終を遠くのベンチから見ていた夫のもとにもどっていった。

私が口を開こうとすると、夫はベンチに残っていたもう1本のジュースを私の手のひらに乗せて言った。

「マイ……リトル……不動明王！」

焼山寺からは、山を上がってくる朝霧の中へ逆行するように、ゆっくりと谷間を下りた。谷は鳥のさえずりにあふれ、いつもは頭上にある鳥の世界へ、今は下りるように入っていくことの不思議さ。芭蕉の句を思い出した。

「雲雀（ひばり）より 空にやすらふ 峠かな」

夫が口笛を吹いて、うぐいすに張りあってみた。でも、のどを鳴らして転がすような鳴き声にはとうてい及ばない。うぐいすのさえずりは、ひと鳴きにして霧も緑も貫いてしまう稲妻であり、龍のように体を下から上へ抜ける稲光だ。

山を下りて麓の村を過ぎると、道しるべの看板が立っていた。

「へんろ道」と「68歳以上の遍路モデルコース」

自分たちは30代だから、何も考えずに「へんろ道」をとった。しばらく歩くと、また看板が細い山道に立っていた。

「上り500メートル」

最初の看板で「へんろ道」とだけあったほうは、実は500メートルも空へ直進するような道だった。どうりで「68歳位以上の山道を迂回するコース」を、ほかにも設けたわけだ。なぜ、ど～して最初の看板で言ってくれなかったあ。

坂道を登りはじめれば、「広告に偽りなし」とはこのこと。手だけでなく、歯で草に噛みついてまでも登りたくなるような、空一直線の道だった。昨日にさんざん登ったあとだけに、これにはすっかりまいった。

やっと11時すぎに、標高455メートルの玉ヶ峠の無人の庵に着いたときは、道に座りこんでしまいそうな体をお堂の軒下までなんとか引きずっていき、

「今、食べなければ死ぬ～」

とばかりにパンをかじりだした。

ところが、視線を感じる。正気にもどって前を見ると、道の反対側に観音菩薩を含む6体の石仏が並んでいた。上には白樺の木があり、時々、白い花がポトリと、深い緑のコケにおおわれた石仏の体を伝うように落ちた。

さらに樺の上には桜の枝が広がっていて、薄いピンク色の花びらがハラハラと石仏に降っていた。

「白樺と桜の花の下に、観音様かあ～。琴の音が聞こえてきそう」

昨日にお接待で頂いた八朔を食べると、石仏にもひと房ずつ献上した。初めて石仏に、お接待をしたかな。夫以外はだれも見えていないのに、なんとなく照れた。

今日は、たくさんのお接待を頂いた。山を下ったあと、お店で懐かしのみかんアメを買ったら、

「お茶でもどうぞ」

お湯のみがのったお盆には、バナナとヤクルトまで乗っていた。玉ヶ峠のあと、小さな食堂でラーメンを食べたら、

「八朔を接待しようか？ 重いかもしれないけど」

おじさんから八朔を頂き、食堂を出てすぐ向かいの店で、これまた懐かしのコッペパンを見つけたので買ったら、

「のどが渴いたとき、飲みなさい」

おばあさんから、ウーロン茶のお接待を頂いた。広野の村で石垣に腰かけていたら、前の家の人が出てきて、

「八朔を、お接待しようか？」

何がうれしいかという、物じゃない。見知らぬ私たちへの、見知らぬ人からの思いやりがうれしくてたまらない。こんなこと、普通では考えられない。起こりえない。難所といわれる十二番を、あんな形で終えたあとだから尚更だった。

今日の宿は、番外の建治寺だ。遠回りだったが、自然がとても豊かな田舎道を歩き続けた。

昔ながらの土の草道には、桜の花びらが敷きつまっていて、その花びらのカーペットに人の姿はなく、ただ道に沿って野花が咲き、鳥の音がするだけだった。

決して楽な道ではなかったが、今日は最後まで郷愁をさそうような田舎の風景の中を歩き、たくさんの美しい野花を見た。ひとつひとつの花の名を知っていたら、どんなに遍路道に行く心も豊かになるだろうか。でも、今の頭にあるのは、お寺の番号だけだ。

山道を行けば 木漏れ日に  
シャガの群れ 星の川となって輝き  
空海のお杖を權に 渡っていく

建治寺に着いたときは4時すぎ。このお寺は役行者ゆかりの寺で、十三番大日寺の奥の院でもある。2階の畳のお部屋に入れていただいてホッとしていると、

「笠をとっても、な～んかまだ頭に笠をかぶっているような気がするなあ」

夫が、頭に触った。

「あっ、へこんでる！ へこんでる！」

菅笠の中の頭をのせる五徳という円形の骨組みに沿って、頭の皮膚がしっかりとへこんでいたのだった。

「ちょっと触ってみろよ。これぞ、天使の輪、いや、空海の輪だ」

自慢げに、脂ぎった頭を傾けてきた。この石頭に、へこみができるなんて。

今夜は、ご住職と食事をともにさせていただいた。ちょっと緊張した。がっしりした体格のご住職は、怒ったらさぞや怖いだろうと思わせるような顔をされていたからだ。でも、穏やかな表情を浮かべながら方言で楽しく話してくださり、夫にも声をかけ

てくださった。

いっしょになった若い女性遍路は、ただご住職のお話を伏し目がちに聞いていた。20代後半ぐらいの、きれいでおとなしそうな人だった。

「お遍路は、初めてですか？」

当たり前のようにそう思って聞けば、

「3回目なんです」

「えっ、3回目？」

私の驚きを越えて、夫の顔がひとつ前に飛び出した。彼女は、長いまつげをした目を軽く閉じた。

「友だちに、『遍路に、はまっている』って言われるんです。はずかしいですが、空海や仏教のことは、今も何も知らないんです。ただ坂本龍馬に興味をもって、高知に来たのがきっかけで……。ほんと、ただ歩いているだけなんです」

前の2周は夏と秋に通しでまわったので、今回は春を選んで通しで歩いている。しかも今日は、あの十二番焼山寺への途中にある柳水庵（私たちがお茶を頂いた庵）から、山を上り下りしてここまで1日で歩いてきたという。信じられない。

「遍路道は人が通らないので、女一人でも安心ですよ」

一口一口ゆっくりとご飯を口に運びながら、余裕で言った。この美しい顔の持ち主、いったいどんな足をしているのだろう。

夕飯のあと、月例の護摩焚きの儀式がお堂で行われた。ご住職のほかに、3人の僧侶と一人の尼僧が同席し、私たちは檀家の人たちの一番後ろに座らせていただいた。後ろとはいえ、こんなに近くで護摩を体験したことはなかった。

ご住職の頭上高く炎が上がり、紙垂の白い紙飾りが揺れる向こうには洞窟があった。そこには、空海が彫ったといわれる金剛蔵王大権現が祭られている。

「ギャーテーギャーテー」

太鼓の音に合わせて、般若心経が何回も何回も、本当に何回も何回もくり返された。私と夫は、いったいいつまで続くのかと首を伸ばして、まわりで経本を読んでいる檀家の様子を見ては、足をモジモジさせていた。その間にも火は煙となってどんどん上り、パチパチと燃える音と太鼓の音がいっしょになって響きわたった。

ところがそんな荘厳な雰囲気にも包まれたご住職と檀家の間を、どこから入ってきたのか、「みなさ～ん、お集りのところをちょっと失礼しますよ～」

とばかりに、2羽のカモがふくふくとした体を左右に揺らしながら、ヨチヨチと得意げに歩いていった。厳かながらも、のどかな田舎のお寺の儀式だった。

護摩焚きが終わったあとの講話で、ご住職がおっしゃった。

「相手を拝め。相手を許せる度量をもて」

ふ～む、ここの不動明王は、私に言いたいことがあるようだ。せっかくそれまで忘れていた失礼なオヤジの記憶が、一気にもどってきてしまった。

「私はあの人を許したか？」というよりも、

「『ふざけるな！』とあの人を責める自分と、『それだから、こういうことになるのだ』と自らを責めるもう一人の自分の、両方を許したか？」

結果から言えば、意外なことにも「許す、許さない」ということではなくなってしまった。

あの時に起きたことは、胸に苦痛を感じているというのに、手っ取り早く「思いやり」と言い聞かせて、自己犠牲的になって我慢をしようとしていたり、反対に自己処罰的になって自分を責めていた自分対して、ついに命そのものが反発した。押し殺されまいと、ものすごい勢いでもどってきたことだった。

その湧き出たような勢いのおかげで、命そのものは本当に幸せに生きたいと思っ  
ていることが、意識の表面にまではっきりと上がってきた。

自分というものが「切実な尊い願い」からできているよう思え、びっくりして意識がそ  
っちに集中してしまったから、「許す、許さない」の葛藤が消えてしまった。オヤジも自分も、  
消えてしまったのだった。

ただ、問題は……、そうでしょう、不動明王さん。私が「切実な尊い願い」の化身な  
ら、あのオヤジだって同じということでしょう。あなたは、それを私に言いたいのでし  
ょう。

でも、自己や他人の批判に、私は疲れたんです。許すと思えば思うほど、ほかのものに  
まで「許せ～ん」が飛び火してしまうんです。

あなたは言うかもしれません。

「そのオヤジのおかげで、お前の命の勢いもどってきたんだろう。大事なことに気がつ  
くことができたんだろう。感謝したらどうだ？」

でもね～、そんなサド、マゾ的な考え方、関係はへんですよ。へん。だから、地球はへ  
んなんです。

そんな風に思っていたら、永久に自分の足りない部分を知るためには「苦という感情」  
を経験させてもらわなくてはいけないなんて、とんでもない思考というか、エネルギー  
循環を自分のまわりに作ってしまうじゃないですか。

自分をいじめる人ばかりを、まわりに呼んでしまうかもしれない。あげくの果てには心  
が疲れてしまい、謙虚な顔の下に大きく卑屈なエゴを隠しもった人間になってしまうか  
もしれないですよ。

人を苦しめて感謝される人が増えるなんてことが、あっていいはずがない。極楽には  
「楽」がついていて、「苦」はないのだから。

それに、人間が本当に知りたいのは、実は自分のことじゃないと思うんです。知りたい  
のは、今日感じた「切実な尊い願い」を体を使って表現しようとしている命というか、自  
分を超えて見えてくる命の本源を知りたいのだと思います。

「切実な尊い願い」という感じが、私が今のところ感じ得たものの中で、命の本源  
にもっとも近いものならば、あの男性の中にもあるはずでしょう。私がお願いを信頼し  
て大切に生きるならば、自然に、彼の命をも大切にすることになるのではありませ  
んか。

それが、相手を拝むことにもなりませんか？ 個を大切にしてお互いに通じてこそ、自然  
のなせる技じゃないですか？

だって、本源においては、みんなひとつなのだから。それが宗教の教えでしょう？ だ  
から、これからは命の「切実な尊い願い」を感じながら、大切に我が道を歩くん  
です。よろしゅうございますか？ 私、今のところこれで精一杯なんです。ご免あそばせ。

(この時は、これで終わったと思った……)

護摩のあと、部屋にもどって布団に寝転がっていると、

「みんなといっしょに、お茶でもどうですか？」

お給仕のおばさんが呼びにきた。コーヒーでもあるのかと1階の広間に行ってみれば、とんでもない。さきイカや柿の種、お饅頭にビール、日本酒などが長いテーブルに置かれ、その両側には20人以上の檀家のおじさんたちが座っていて、すでに徳利を片手に盛り上げていた。

「あ～、こっちに来て一杯、まあ一杯！」

夫は、大歓迎された。みなさんの思いやりには、本当に感謝だ。とくにご住職のもとで修験道を学んで20年のおじさんは、さっそく夫を横に座らせて、夏祭りの写真を見せて説明しはじめた。

「ほら、こうして火渡りもしたんだ」

おちょこではなくて茶碗を夫に持たせ、日本酒をどんどん注ぎはじめた。おじさんにピッタリとくっつかれ、彼はうれしそうに、

「今夜は、酔っぱらっちゃうかもしれないよ」

テーブル越しに、ウインクをしてきた。おじさんが、お構いなしにどんどん日本語で話をするので、

「あ～、そうですか。はい、これは、いい写真ですね」

必死で相づちを打っている姿をおもしろおかしく見ていると、そんな私を、同じようにいたずらっぽい笑みを浮かべて見ている、もう一人のおじさんに気がついた。ピタリと視線が合うと、彼は待ってましたとばかりに言った。

「おれたち、顔見知りだよな！」

「あっ！」

今日、途中で建治寺への道を聞いた人だった。あの時、おじさんは家の角に立っていたのだが、どうりで詳しくお寺への道順を教えてくれたわけだ。

おじさんは、檀家になってお寺に通うようになってから、悪いことは全くできなくなったと言い、おつまみに手を伸ばしながら、なんという事もなしに付け足した。

「神や仏の力というよりは、自分の中に全部ある」

僧侶でもない普通の田舎のおじさんが、力むこともなくそういう姿。言ったあとに、柿の種をボリボリと食べる姿。「言うは安し、行うは難し」と言えども、なんかラフで、いい！

「ここに泊まったのは3回目だけど、護摩焚きも、こんな夜も初めてだわ」

若い女性遍路も、赤い目をしたままお茶を飲みながら感激していた。

部屋にもどったときは11時をまわっていて、窓の向こうには街の灯りがきらめいていた。この寺も山の上にあるのだと、あらためて気がついた。

(シャガの花言葉は、決心、抵抗、反抗)

## Day 06 走るお大師様たち

「私は、奇跡を3回ぐらい経験した。だからわかる。お大師さまはいらっしゃる。信じればわかる」

今でも忘れられない人となった宿のおばあさんの話は、シャケと湯気の立ったお味噌汁、ご飯、卵焼きとノリを前にこうして始まった。

最初のうちはテーブルの向かいに座って笑顔を浮かべ、こちらの様子をうかがっているような感じだったが、実のところは、

「さてお大師さま、この子たちにはどんなお話をしましょうか？」

空海に、相談をしていたのかもしれない。私たちはといえば、正直、びっくりしたというか、絶句したというか。

「この人も、『お大師さま』なんて親しげに呼んでいる。空海が活着していると思っている……」

遍路道六日目の私たちには、「お大師さま」という呼び名は熱すぎる。聞くだけで、心のどこかが照れる。自分たちが四国で今、どんな世界に足を突っ込んでいるのかが日に日に明らかになっていくようで、腰が引けてくる。

目の前に相思相愛のカップルが現れて、二人の純粋な信頼関係を見て動揺する独身貴族のような気持ちか。しかもこのおばあさんは、死んでいる空海を伴侶に、みごとにそれをやってのけた。

歴史の教科書の「空海」と、四国の「お大師さま」との間にある大きな川、いや海かもしれない。おばあさんは、はるか遠くの対岸にいるようだった。その横には黒猫のミミがピッタリとくっついて、

「なにをいっているのかニャン？」

真剣に考えているように耳を傾けた。

「四十五番岩屋寺の階段を上がっていたとき、私は足が悪いから後からついていったけど、ふと体が軽くなって飛んで歩いたんよ。本当！ 足は地についてはいたけど、ひょいひょいとね。お大師さまだ。こんな経験をした人は、たくさんいる」

十二番焼山寺へ向かう森の中でおにぎりをあげたおじさんも、確か、四十五番の階段でリュックが軽くなったと言っていた。

「坂東三十三ヶ所では、秘仏様をあるお寺で見せていただいた。1列に並んで見せていただいたけど、私の後ろにいた人が見たときは、目が輝いていた。その人は心のきれいな人だったから、秘仏様がそれを讃えたんだと思う。ありがたかったあ〜」

私たちのお杖を拜んでくれた最初の人、全国の霊場を拜んでまわった人のようだ。

「二人は歩いてまわれるなんて、幸せだよ。私は80歳を超えて、よう歩けんから」

食べるのを忘れて聞いている私たちを前に、おばあさんの口調はどんどん強くなっていく。「それでも、1年に1回は行く。行かんと、体が汚れてくるのがわかる。1回のバスで12万から13万円はかかるから、半分にして、今年は半分、来年はその半分……」

涙が、自分のほほを伝った。やっぱり十二番焼山寺への道は、いろいろな意味でこたえたようだ。

それが、おばあさん、いや「おばあちゃん」のお話によって癒されていく。信じる、信じないということよりも、「がんばりなさいね」と、何かがこの人を通して言ってくれている気がした。もしかしたら今、すばらしい経験をさせてもらっているのかもしれない

という気になってきた。自分の時間が、この人によって清められていくかのようだった。

出発の時におばあちゃんから、お昼用のおにぎりを頂いた。そして、黒アメも。「ポケットに入れておくといいよ。なめれば、つばが出てくる。疲れたときに食べるのが、一番だよ」

おばあちゃんは、口の中にポンとアメを入れる動作をしながら説明してくれた。懐かしい。子どものとき以来の黒アメだ。今でも売っているなんて。こういうアメは、おばあちゃんからもらうに限る。味わいが増す。

おばあちゃんと娘さんにお礼を言って、私たちは歩き出した。数十メートル歩いて曲がり角にきたときに、振りかえって最後の一礼をして歩き出そうとすると、

「そっちじゃなくて、左。左だよ～」

左腕を振るようにして、80過ぎのおばあちゃんが走ってくる！ もう、あわてた。二人とも全速力で走りよって、息切れしてかがみ込もうとしているおばあちゃんの背中に手をあてた。何度もお礼を言い、娘さんは玄関先で、おばあちゃんはそのままそこで見送ってくれた。

おばあちゃんは「お大師さま」を本当に信じているから、私たちのお杖を拝み、笠を直してくれた。でも何よりも、とても賢い人なのだと思う。なぜなら朝食のとき、最後に微笑みながら言ったのだ。

「神も仏も、みんなひとつ。」

本当に大切なことは、それも超えて、美しい心で生きることだと思うよ」

週明けの繁華街は、祭りの後みたいにゴミだらけで汚かった。そんな中を歩いていると、

「お遍路さ～ん」

大きな声がする。振りむけば、割烹着をつけたおばさんが走ってきて、

「歩いてまわってんの。えらいな～。これで何か飲んで」

私の手にドラエもんのお年玉袋を握らせると、すぐに道の向こうに止めてあった車に乗って行ってしまった。一瞬のようなできごとだった。いったいこの袋は何なんだろうかと、疑心暗鬼で中を見てみれば、1000円が入っている。

こんなことって、あるのだろうか？ お祝い事以外で、他人から現金をもらうなんて。狐につままれたような感じで、お金をお財布の中にしまっていると、

「さすが、空海だ！ 今日がぼくのお誕生日だってことを、知っているんだ！」

ということで、壁にキリンと象の絵が描かれたケーキ屋を見つけると、チーズケーキと Milfie ユを買って、店先のテーブルでパクついた。これが、夫の34歳のお誕生日ケーキとなった。

今日は、暑くて暑くてたまらない。風も強かったので、私の笠が何度も飛びそうになり、挙げ句の果てに雨傘のように裏返しになってしまった。

竹でできた笠が、おちょこになったことですら信じられないのに、そのまま頭についたことにはもっと驚いた。大鶴旅館のおばあちゃんが、紐を足して補強してくれたおかげだ。

徳島の大通りを抜けて、十八番恩山寺に着いたのは12時頃。大きな寺だった。でも、記憶に残っているのはそれだけ。

ただ出発しようとしていると、10人ぐらいのバス遍路の団体とすれちがった。その中の40代のリーダーの女性と目が合ったので挨拶すると、向こうも振りかえった。

「歩いているの、何日目？ たいへんね」

「まだ六日目ですけど」

「ずっと通しで歩くの？」

おかしなことだ。心中は歩き通せるか心配でたまらないし、帰ろうかとさえ思ったりしているのに、人に聞かれると堂々と「はい！」と言う。「全く問題ありませ〜ん」みたいな自分がある。「すごいな〜」と相手が驚いてくれると、それによって自分を励ましている。虚栄だ、あ〜、虚勢だ……。

彼女のように、団体の遍路をガイドする人を先達といい、最低でも4回は八十八ヶ所を巡拝していなければいけないらしいが、この人は歩いてまわったことがあるにちがいない。

「奥の院にも行く予定です」

また虚勢で言えば、いかにもこの先を思いやるような目をして私を見たのだから。そして、一瞬くると背を向けたかと思うと、またこちらを向いて、

「これで、何か二人でジュースでも飲んで」

2000円のお接待だった。夫があわてて納め札をわたすと、今度はグループの別の人が銀の納め札をくれた。

「銀色の折り紙で、わざわざ作る人もいるんだ。こってるなあ〜」

納め札の色の意味どころか、「お大師さま信仰」という言葉すら知らなかった私たちは、この時はただ感心しただけだった。

「さあ、みんな」

先達の女性が体育の先生のように言うと、彼女よりずっと年をとったおじいさんやおばあさんたちが、サッと1列になって本堂への道を歩いていった。

大鶴旅館のおばあちゃんに会って以来、バスの遍路に対する考えも変わってきた。前はバスの排気ガスが加わって、見るだけで疲れた。でも、その中にも真剣に祈っている人がいること、それしか方法がない人、歩いてまわる遍路を気づかったり、いたわってくれる人びとがいるということを知った。

お寺を出たあとの道は、竹林を抜ける細い道だった。美しい。もったいなくて、ゆっくりゆっくり歩いていると、道の反対側からもんぺ姿のおばあさんがやってきた。少し前屈みになり、ごく自然に片手で帽子のつばを直しながら、あちらもゆっくりと歩いてくる。

緑の風のベールが少しだけめくれて、向こうの世界にいるおばあさんを垣間見たような錯覚を覚え、彼女が通りすぎたあともその幻想世界を引きのぼそうと、遠ざかる足音に耳をすました。自分たちが緑の風の中へとかき消えていかないのが、不思議なくらいだった。

お昼は小さなうどん屋でうどんを食べ、くずれかけた番外のお京塚の前を歩いて十九番へ。

十九番立江寺は町の中で、ひっきりなしに団体が入ってきた。本堂にはハトが巣を作っていて、お寺に鳥の巣があるとホッとする自分がいることに気がついた。

そのうちに明るい空から、にわか雨が降ってきた。細やかな糸雨だった。音に耳を澄ますかのように、お堂の下で雨を見つめながらおにぎりを食べた。

食べ終わると、大鶴旅館のおばあちゃんを思いながらお接待のお弁当包みに二人で一礼して、二十番を目指した。

延々とコンクリートの道が続き、足の痛みをこらえながら黙々と歩いていると、遠くの畑にいた犬がこっちを見て吠えだした。雑種のような子犬で、近くで一人のおばさんが働いていた。

「また犬か、うるさいなあ〜」

うんざりしそうになったが、どうも様子がおかしい。私たちに吠えながら、横で畑仕事をしているおばさんを、ちょこちょこ見ている。

「ママ、ぼく、仕事してます。りっぱに番犬として吠えています」

そうアピールしているのかと思った。ところがおばさんは手を止めると、急いで近くにあった車に行って何かを取りだし、

「お遍路さ〜ん、接待を受けてくださ〜い」

手を上げて、犬といっしょに走ってきた。手にはティッシュケースが握られていた。

「うちのおばあちゃんが、作っているんです。納め札も、よかったらください」

納め札は、おばあちゃんが大切にしまっているのだという。

「この犬は、お遍路さんが大好きなんです。見つけると、教えてくれるんです。吠え方が、全然ちがうんです」

横では、夫がもう犬とじゃれていて、そう言われて犬を見てみれば、今度はとてもかわいく見えてくる。

「ママ、遍路が来たよ。急いで！ 急いで用意して！」

この子は、そう教えていたのだ。

おばさんと犬にお礼を言ってから歩き出すと、夫がズボンを指さした。

「あの犬は、きっと大きな犬になるよ。見ろよ、これ」

彼の濃紺のズボンには、土色の大きな肉球の跡がペタペタとついていた。

ゆるい坂道を歩きに歩いて、星の岩屋に着いたときは7時をまわっていた。その美しい名前のごとく珍しいほどひっそりとした所で、いかにも修行の場といった感じの滝があり、赤い橋がかかり、一軒の小さな家が横に建っていた。

昨日に星谷寺に電話をしてお通夜を頼んだときに、

「すでに二人いるから、その人たちが入れてくれるよ」

そう言われたのだが、二人がまさか僧侶だとは思わなかった。大柄の谷川さんと、桜田さん。二人とも、30歳前後だろうか。

私たちは、2階の一室を借りた。滝のそばにあるために家の中はちょっと湿っていて、炭が部屋のあちこちに置いてあった。

リュックの中の食べ物をあさって夕食としたあと、桜田さんが話をしに部屋にやって

きた。落ち着いたのある人で、元は建築家だったという。その縁で、近タインドへ派遣されるらしい。

「いい顔をしているね」

彼は、とても私たちを歓迎してくれた。あ〜、ホッとした。

4回目の遍路らしく、遍路道にはとても詳しくあった。無料で泊まれる通夜堂や、遍路を泊めてくれる民家もあるらしい。

夫と桜田さんは、さっそくバス遍路と歩きの遍路について話しはじめた。

「通しで歩き続ける遍路は、仕事をやめたり、家族を残してきたり、多くの物を捨てて真剣に歩いている。お金や時間を使って、懸命に歩いている。区切り打ちや車、バスの人々には、それほど強いコミットメントはない」

夫が言うと、桜田さんが、

「あなたは、歩きの遍路とほかの遍路を比べている。遍路を比べている」

するとまた夫が、

「遍路を比べているんじゃない。遍路に限らない。何をするにつけても、自分のコミットメントの強さ、真剣さのちがいがいから得られる経験を比べているんです」

バス遍路をしたわけでもないし、足だって痛いときに、よくもまあこんなことを議論してられるものだと、男二人を斜に見ていれば、

「どう思いますか？」

お鉢が、急にこっちにまわってきた。

「バスのことはわかりません。でも歩くことは、足の裏を刺激して脳にいいと聞いています」

話をはぐらかせば、桜田さんが吹き出した。

「いや〜、刺激がありすぎて、脳がこわれそうですよ」

本当にそうだ。足の裏には体中のツボがあるらしいが、ツボに刺激がいきすぎて、脳が麻痺している感じだ。「食べる」と「歩け」の二つの指令しか、出せなくなってきている。足を癒すツボは、いったいどこにあるのだろうか？ もしそれも足の裏だったら、お手上げじゃないか。

「脳は、摂取カロリーの25パーセントを使います。コンビニのジャンクフードばかり食べていたら、頭によくありません。おじいちゃんや、おばあちゃんには、特によくありません。ちょっと記憶力が落ちます」

ジャンクフードばかりこの六日間食べてきた夫が、何食わぬ顔をして言うと、

「大丈夫です」

桜田さんが、ニヤッとした。

「遍路を続ければ、少量の食料でも脳は満足するようになりますよ。痩せますよ」

太鼓判を押すように言うので、こっちのほうがお寺参りよりも重要だとばかりに、

「本当ですか？ どんな人間でもスリム化、いや、遍路道でエコ化しますか？」

私が聞けば、

「ハイブリッド化ってことですか？ すごい。プ、プ、プリウス人ですか？」

夫も聞き返して爆笑となった。遍路をして「環境に優しいプリウス人」になれると聞けば、この私だってなんとなくその気になってくる。

お坊さん二人と、同じ屋根の下に眠る星の岩屋か。  
滝の水が、流れ落ちる音がする。月のきれいな夜だ。

## Chapter 2 Kochi

### Day 19 歩けるところまで、歩いてみれば

「どこまで続くのかって感じですよ。急なところが多くて、草をつかんで登りました。3キロなんて、ウソですよ」

難所の二十七番神峯寺への道を、二十六番で夕飯をともにしたおじさん遍路がこんな風に言っていたし、ここ数日、夜になると夫の咳がひどい。自分の足の痛みに加えて、頼みのパートナーがこんな調子だったので、心細くなっていた。

出発したのは、6時40分。標高430メートルにあるお寺までの山道は、確かに急な坂道だった。ただ曇り空だったので日照りによる暑さもなかったし、道もそれほど草ぼうぼうではなくて、むしろ気持ちがいいぐらいの山登りだった。

山道から車道に出たところではライトバンが通過していき、そのとき車の窓が開いた。「がんばってんじゃん！」

片手を振りながら、運転していたおばさんが声援を送ってきた。友人に会ったかのような、明るい声かけだった。町のどこかで、私たちを見かけたらしい。やっぱりみんなこうして、遍路のことを見ているのだった。

陽気な彼女の声にも励まされて、8寺過ぎにはお寺の下の駐車場に着いてしまった。もちろん、宿に荷物を置いて手ぶらで行けたおかげだ。あ～、こんな感じで、すべての遍路道をまわれたらなあ。

駐車場のトイレからもどると、自動販売機の近くで、夫が自転車の青年遍路としゃべっていた。サーファーのように真っ黒。汗ダラダラというよりも、ギラギラ状態で缶ジュースを飲んでいた。

「ご主人から、お接待をいただきました」

私が近づくと、ポカリスエットの缶を上げてみせた。汗が滝となって流れども、笑顔は実にさわやかで、とてもリラックスしてしゃべっていた。

エネルギー全開の若者って、清々しい。みんなあふれるばかりの命を、毎日燃焼したいんだよなあ。生きていて、そういうことじゃないだろうか。

1日150キロもこぎ、心拍数はいつもかなり高めらしく、ここへも車道をこいで登ってきたという。

「自分で、ももを痛めつけている感じがしますよ」

青年は、短パンから出ていた太ももを叩いた。筋肉隆々で、パンパン。いろいろな筋肉がしばり込まれて、骨に食い込むようにくっついているのがわかる。クジラが重なり合って海にもぐろうとしているような、それはみごとな起伏だ。真っ黒に輝いていて、慈眼寺の木魚じゃないが、叩いてみたい衝動にかられた。

「野宿してるもんで、もう何よりもお風呂に入りたいっすよ」

これだけ毎日汗をかけば、当たり前だな。でも雨の中を走れば、シャワーも洗濯も、

同時にできそうに見える。

昨日は、歩きで2泊3日かかる二十三番から二十四番までの海沿いの道を、夜間に走ったらしい。歩きの遍路を3人ぐらい追い越し、

「こんな遅くに歩いているんですか？」

そのうちの一人に話しかけると、高野山のお坊さんだった。前夜から何も食べていないと言うので、パンをあげると、

「今日は、もうここで寝る～」

いきなりへたへたと、道に座りこんでしまったという。たくさんの店が廃業しているので、長い間、何も食べていなかったらしい。お坊さんですら、たいへんな思いをして歩いていると聞くと、毎度ながらこちらは元気が出る。ごめんよ、お坊さん。

このあと坂道を納経所の方へ登り始めると、若い女性遍路が下りてきた。

「もうすぐそこですよ。お気をつけて」

鈴の音のような声で言うと、軽くお辞儀をして過ぎていった。その朗らかさから、この乙女遍路がいかにもいい時間を過ごしているのかがわかり、こちらでも感化されてくるほどだった。(この人とは、またのちに会うことになる)

続いて、黒いTシャツを着てサングラスをかけた大柄な50代ぐらいの男性が、ほぼ同じ服装をした30前後の女性とともに下ってきた。男性は白人だったが、夫を見ても足も止めず、

「がんばれ！」

ニコリともせずにはしゃがれた声で言い、女性のほうは黙って通りすぎていった。

「ありゃ～、アメリカ人だわ」

私が言うと、夫が去っていく二人を振りかえって笑った。

納経所へ登っていくと、お堂はまだその上のようにがっかり。大きなお寺だ。ロープウェイがないせいか、お寺全体が山とひとつになっているかのように、ひっそりとして深い雰囲気をもっていた。

「あんたたちも歩き？」

納経所の前に停車していたタクシーから、おじさんが顔を出した。

「おばちゃん、お茶を二つ追加ね」

納経所の中へ向かって言うと、私たちの方をまた振りかえった。

「歩きの遍路には、お茶とお菓子をふるまってくれるんだ。あっちに行くといい」

縁側の方を指しながら、まじまじと夫を見た。

「この人、外人さん？ えらいな～。25歳ぐらいかなあ？」

毎度のことながら若く見られて、夫は「はい」とまたウソをついた。

縁側では、すでに二人のおばあさん遍路がお茶を飲みながら、ひざを寄せ合うように座って話をしていた。二人とも73歳。友人ではなくて、何度も出くわすのだという。

「これ、あなたのですか？」

夫が、数珠をポケットから出して見せた。お寺への山道で、また落ちていた数珠を拾ったのだった。右側のおばあちゃんが、あわてて自分のポケットを探った。

「まあ、ほんと」

また、大当たりか！

「これも、ご縁ですね。落としたなんて、気がつかなかったわ。どうもありがとう」

この73歳の方が、あの山道をリュックを背負って登ってきたのか。すごい。もうひとりのおばあさんなんて、よく見ると裸足。町からここまで、裸足で来たらしい。

「思うことがあって、このお寺の有名なお話のようにおかげにあやかりたいから、裸足できました」

「痛くありませんか？」

「山育ちだから」

とても優しく微笑んだ。その声が、山育ちどころか天女のように上品だった。

お寺の有名な話とは、三菱財閥を築いた岩崎弥太郎の母親のことにちがいない。20キロも離れた自宅から、21日間の間、毎日、坂を登ってお寺にお参りをしたという。息子の開運を祈ったらしいが、すごい効果だな。

お茶とお菓子を持ってきてくださったのは、お寺の奥さんだろうか。

「歩きですか？ さっきも若い歩きの女性の遍路がいましたよ。ごくろうさま。気をつけてね」

温かいお寺だ。このお寺は檀家とか持たない主義で、そのためお墓もないという。

私たちはお茶をいただき、一息ついてからお堂の方へ登っていった。

大師堂では、数珠を落としたほうのおばあさんが、一本一本ローソクと線香をあげ、ゆっくりとお経を読んでいる姿が見えた。無言の祈りが、朝のお山にとけ込んでいくようだった。

二人の老女は、自分以外の人のために巡礼に出ているにちがいない。

「きれいに生きたい」

人は思うものだけれど、そんな思いの権化が見られたような朝だった。

お参りをすませると、宿でお接待に頂いたおにぎりを食べて、さらに上にある神峯神社へ向かった。二十七番の奥の院だが、かつてはここが札所だったらしい。

あたりには薄い霧が流れ、草が、やけに青々とした山道だった。遍路もめったに来ないようで、ひっそりとした社には霧だけが流れていた。

神社には、有名な「灯明岩」があった。日清戦争、日露戦争、関東大震災など、有事や天変地異がくる前に光り輝いて、里の人たちに災いが来ることを知らせたと言われていた。

でも岩よりも、神社へと続く森の小道に興味を湧いた。秘密の小道のようで、心を調律してくれた感じがした。こういう自然は、やはりあるんだなあ。

もし「四国遍路道で、もう一度登ってみたいところはどこ？」と聞かれたら、この神社も確実にそのひとつだ。

山を下りて、もうすぐ麓というときだった。歩きのおじいさん遍路が登ってきたのだが、すれちがったとき、夫がうっかり彼のお杖を蹴ってしまった。

「すみません」

あわてて謝ると、おじいさんは、いきなり両手で夫の手を包んだ。

「いやいや、ありがとう、ありがとう」

夫の目を見てから、低い声でうなずくように言った。

日本文化への夫の関心に、感謝をしているのか？ おじいさんの戦争体験からくる「今ある平和の尊さ」への感謝の気持ちが、底にあるような感じだった。あの人はいったい何を考えながら、思い出しながら歩いていたのだろうか？

「いやいや、ありがとう、ありがとう」

これだけなのに、口には出して言えないとても深い気持ちが伝わってきた。この人たちの世代が消えたとき、この手を握って「ありがとう」という行為も消えてしまうのだろうか……。

「ほら、これ！」

麓の川に出たとき、夫がガードレールの上の青ガエルを指した。毎日、自分がギリギリだからだろうか。カエルすらも、何かを考えているように見える。

川をのぞけば魚がいて、一筆書きのように泳いでいた。ドジョウも多い。

「ドジョウは陸に上がりたくて、ついにトカゲになったのかな？」

夫がつぶやいた。

ドライブイン27にもどり、遅い朝食を食べたのは11時。元気のいいおかみさんにいろいろと励まされながら発つときには、雨が降りだしていた。

雨脚は強くなっていくし、足もとことん痛い。一息つきたいと思ったが、地図にある店はほとんどが閉店していて、今日という今日は、本当に泣きたくなくなった。

やっとコーヒーショップを見つけたのは、2時間後。

「どうせ閉まっているよ」

あきらめきってドアに近よることすらしない夫をおいて、恐る恐る曇りガラスのドアを開けると、

「いらっしゃいませ～」

もうパラダイスだよ、パラダイス。こちらが、お辞儀をしなくなった。

1杯350円のコーヒーを飲みながら足の痛みが引くのを待って、また重い腰を上げたのは30分後だった。夜須町のサイクリングターミナルに電話すれば、素泊まり可で3000円というので、そこまでがんばってみることにした。

「人は親切にアドバイスしてくれるけど、まちがっていることもあるよ。だから自分でもかかってみる。行けるところまで、行ってみればいいんだよ」

昨日に中山峠越えをするときに夫が言ったが、今日はこの言葉を実行した一日となった。先のことは考えず、安芸市を出てラーメン屋で腹ごしらえをすると、サイクリングロードをひたすら歩いた。雨は、すでにやんでいた。

おにぎり ラーメン ケーキに あんぱん  
なんでもお腹につめこんで  
カエルが鳴く鳴く海のよこ  
懐中電灯 片手に進めば  
左で沈むは土佐の海 膨れ上がるは波の音

八流山極楽寺のあたりで、男性遍路が一人、ぬれた地べたに座りこんで地図を見ていた。リュックは子ども用みたいなもので、疲れて肩から腰までがっくりきている感じだった。

「大丈夫ですか？」

話しかけて、ハッとした。首から、微笑んでいる美しい女性の写真がかかっていた。そういう思いで遍路をしている人もいるんだ。いきなり心が沈んだ。

「道、わかりますか？」

夫が話しかけると、男性は顔を上げ、私の方を見て苦笑した。

「どうして外人がわかって、日本人がわかんないのかな～」

夫は、彼の地図に指をおいて示した。

「今、あなたは、ここらへんにいます」

「え、ここ？」

目玉が飛び出んばかりだ。40代だろうか。とても感じがよく、そのあとも今夜は同じ宿のようなので、「じゃ、また今夜」と言って別れた。

サイクリングロードは、最初は防波堤が高く海が見えなかったし、右側にはゴミが散らかっていて汚かった。ところが堤防が消えるや否や、浜辺に沿った道になり、あ～、夕暮れの琴が浜の美しさといったら……。日々、こんな場所で暮らしている人もいるんだな。

浜辺の施設でケーキセットを食べて、またサイクリングロードに出てみれば、土佐の海は灰色だった。海辺を散歩する人たちが、白人遍路を見て笑みを浮かべたり、あっけにとられたりしていた。

そのうち日がすっかり暮れて、波音だけが聞こえてくると、懐中電灯を持って歩いた。車が通らないから安全だが、狭い道のあちこちにはカエルがいて大合唱をしていた。し～んとしているよりは、カエルでもいたほうが心強いが、ともかく踏まないように夫は足元を照らし、私は前方を照らして歩かなければいけなかった。

そんな私たちを、少年が一人、自転車で追い越していった。太った意地悪坊主のような子で、12歳ぐらいか。会社帰りに一杯ひっかけたおじさんが、鼻歌まじりに自転車をこいでいくような、いかにも上機嫌といった顔をしていた。

しばらくすると両親らしき30代後半の男女が、私たちを同じように抜いていった。並んで自転車をこぎ、まるで恋人時代を思い出しているような笑みを二人とも浮かべていた。家族旅行に来ているのだろう。やがて二人は、私たちが目指すサイクリングターミナルの方へ、先の道を左に折れていった。

数分して、私たちもその曲がり角を曲がろうとしたときだった。あの少年が泣き出しそうな顔をして、道を引き返してきた。

「おとうさ～ん」

虫の息のような声で言っている。どうもターミナルへと道を曲がるのを忘れて直進してしまい、何気に振りかえれば、

「あれ、親がいない！」

一気に酔いがさめて、大慌てしてもどってきたようだった。

「あっちよ！」

私が少年に道を示すと、お礼も言わずに、急に方向転換したハチのように夢中で自転車をこいでいった。しばらくすると、遠くの暗闇から「おとうさ〜ん」と2回も大きな声が聞こえた。2回目のほうがさらに大きな声で、いかにも訴えるような感じだったので、どうやら両親を無事に見つけたらしい。

でも、その泣き叫ぶ声のおかしいこと。あんなきかん坊そうな顔をして、まだほんの子どもなのだ。ジャンアンのような体格して、学校ではずいぶんと威張っているだろうに……。

やっとサイクリングターミナルに到着したときは、9時すぎだった。33キロ歩いたので、新記録。ここがきれいな施設だったので、その甲斐もあったというものだ。すぐに、夕食がわりに持っていたパンを食べた。

しばらくすると、途中で道に座っていた男性遍路がとなりの部屋にチェックインして、私たちの部屋を訪ねてきた。ほんの数ヶ月前に奥さんを亡くし、思いつくままに出てきたという。

気さくに笑って話す人だが、あまりに感じがいいので、悲しみが逆に伝わってきた。腰が痛いらしく、十二番焼山寺への山道では、途中で疲労から痙攣を起こしてしまったらしい。

「通りすぎていく人たちが、『なんとか柳水庵まで行けば、水があるから』と言ってくれましてね。でも、結局、途中の山の中で野宿となりました。『お化けが出てくるものなら、出てこい。殺すなら殺せ。そうしたら、同じお化けどうした。こっちがやっつけてやる』って、思いましたよ」

「塩を持っていますか？ 塩をひとつまみ肩におくと、除霊になるとお坊さんから聞きました」

アドバイスをしたつもりだったのだが、彼はほんの少し微笑むと小声で言った。

「私の場合は、妻が肩にのっていますから……」

自分の胸に、一気に大きな穴が空いたようだった。自分の考えの足りなさに息が止まって、何も言えなくなってしまった。

「腰が痛いなら、リュックを変えたらどうですか」

夫が助け舟を出すかのように、自分のリュックを彼の背中にもっていった。最初は半信半疑な顔をしていたが、夫がウエストベルトを調節すると、

「あ〜、ぜんぜんちがう！」

また、目から鱗のような声を上げた。なんて真っすぐに驚く人なんだろう。

これまで集めてきた遍路道情報を、私たちはすべて彼に教えた。絶対に結願してほしい。ただ、装備が不十分に見える。服も速乾のものではなく、あれでは身体への負担が大きすぎる。おそらく、居ても立ってもいられなくて出てきたのだろう。ここまでのいろいろな遍路と知り合い、励まし合ってきたらしい。

質問などせずに、ただ話を聞いていれば、

「たくさんの人に出会い、たくさんの人と別れました」

そう言って、男性は部屋へもどっていった。

そのあと、私たちもただ黙って寝る用意をした。何かを夫に言いたかったけれど、まちがった音にして出すことが怖かった。正しい音になるまで、黙っていようと思った。彼も、きっと同じ気持ちにちがいない。

今日は、初めて夜道を長々と歩いた。体全体が、目になって動いていた気がする。そのせいか、足の方は悲鳴をあげているのに、体全体の神経は興奮状態だ。行けるところまで行くためには、体と心をひとつにすることが大切だな。

そういえば、神峯寺の掲示板に書いてあった。

「人の道は心にあり。心は行いにあり」

ネイティブアメリカンと同じだ。

## Day 31 白い犬と足を読む女性

5時30分、身なりを整えた白装束の遍路たちに圧倒されたのか、飛び込みのサーファーたちは、はじのほうで黙って食事をしていた。

朝は辛いと思っても、何でこんなことをしているのだろうと思っても、髪の毛ぼうぼうで朝ご飯をほお張る青年たちを見ると、やはり自分は遍路で、これでも気持ちを引き締めて歩いているのかもしれないと思えてきた。

おかみさんの勧めで、食後はみんなで朝日を拝んだ。遍路がそろって玄関の外に出て、朝日に手を合わす。遍路に出て初めてのことで、夫によれば、おじさんたちは子どものように朝日に両手を広げ、太陽を歓迎していたらしい。

昨夜は飲んで楽しげだった彼らの顔も、朝はまたちがって見えた。白い衣装が清潔で、しなやかな肉体をもつ人たちだった。あの年で、あの柔らかさはすごい。気の流れがいい。あれこそ、セクシーだ。

このあと一人、二人と発っていき、寂しいぐらいに宿は静かになっていった。私たちは、6時40分ごろ出発。そのとき、おかみさんに深夜過ぎに来た人について聞いてみれば、遍路で、足摺岬への道を聞いてきたという。

この宿が「お遍路ステーション」になっていて、24時間体制で遍路に対応しているかららしいが、あんな時間に足摺岬へ向かう遍路がいるとは……。またおかみさんも、そうまでして遍路の世話をしているなんて。こういう人たちがいるから、遍路道はあるんだな。ここに泊まれて、本当によかった。

大岐海岸では二人とも裸足になって、波打ち際すれすれの砂浜を歩いた。ゴールデンウィークの真っ最中のせいか、サーファーが多い。

彼らの間を遍路姿で歩くのは、ほんと、奇妙なことだ。自分が遍路道を歩いているということ以外は、今、どこの時代にもおかしくないように思えてくる。サーファーといっしょに、この浜で原始人が貝を掘っていたり、平安貴族が船を海に浮かべて歌など読んでいたとしても驚かないだろう。

長いボードを片手に、波へ向かっていく黒装束のサーファーの姿は、それぐらい自分とは美しく無関係に見える。あちらのやっていることにも、生活感がないというか、時間に縛られていないように見えるからか。人間がみんなこんな感じで生活をするようになったら、言語の中から過去形や未来形は消えるかも……。

サーファーは大波を待ってプカプカと海に浮びながら、浜辺をトコトコいく遍路を見て、何かを感じているのだろうか。

空と海は青く、砂は白く、水が火照った足を癒してくれた。海はいい。浜に描かれた細かい足跡は、急ぎ足で逃げるカニのもの。

夫はその上に、「へんろみち↑」と大きな道しるべを書きたした。満ち潮による波がさらっていくまで、いったい何人の歩きの遍路が見てくれるだろうか。

足摺への道には、信じられないぐらい何もなかった。狭くて1車線になったり2車線になったりして、そこを観光のオートバイが通りすぎた。

しばらくすると、久百々でいっしょだった鈴木さんが道に座って休んでいた。腰が痛いので、こうしてよく休むらしい。さっそく夫がリュックを背負わせて、ベルトを締めなおした。ウエストラインではなく、腰骨のところにベルトがくるように調節すると、

「あー、ちがう！ 全然ちがう」

鈴木さんは、登山の経験がないのだろう。ベルトの位置で、こんなにも腰への負担がちがうことに、あっけにとられていた。

「あなたは、私のお大師さまです」

夫は、四国で最高級の賛嘆のお言葉まで頂いて、このあと彼といっしょに歩くことになった。定年退職して区切り打ちで歩いていることしか知らないが、たった半日で、私はこの人から多くのことを学んだ。

たとえば、無人の小さな神社で休んでいるときだった。なんか人の気配がすると思って社の方を見れば、いきなり片目がつぶれかかって歯の抜けたおばあさんが社の後ろから出てきた。

こっちを見て、まくしたてるようなすごい剣幕で何かを言ったのだが、あまりに突然で立ちすくんでしまった。こんなことを言っては申し訳ないが、ゲゲゲの鬼太郎に出てくる妖怪のように見え、何を叫んでいるのかもわからない。飛びかかれるのではないかと、怖くなって後ずさりし始めた。そこへ、

「あ〜、そうですか」

鈴木さんが、感じのいい大声を出したのだった。そのせいで、おばあさんの動きが止まった。彼には、このおばあさんの耳が遠いことも、すぐにわかったのだ。

そして、二言三言だけ話しかけると、

「おばあさんも、元気でね。じゃね」

みんなしてその場を去るように導いた。すごい。頼れる人だ。この人は、きっといろいろな経験を積んでいるにちがいない。

次に驚かされたのは、三十八番近くにある遍路小屋だった。にわか雨が降ってきたので駆けこめば、壁には納め札や遍路の写真などがたくさんはってあった。中には、インドネシア人やアメリカ人の納め札もある。

トタン屋根を打つ雨音の中で、座りこんでそれらを見ていると、優しそうなおばあさんが現れた。この小屋の持ち主だった。

「あ、おじゃましています」

鈴木さんはすぐに立って言うと、久百々のおかみさんが遍路みんなにお接待してくれたランチボックスからアメを取りだして、おばあさんに差し出したのだった。お礼のつもりなのだろう。

遍路をしていると、向こうから何かが出てくるのを待ってしまいがちになるのに、鈴木さんは最初に差し出した。こんな人、初めてだ。普通のマナーとかじゃない。そんな浅い気持ちから出た行為ではないように思われた。

遍路小屋の持ち主であるおばあさんは、84歳。私たちの近くに腰をかけて、楽しそうに話をしてくれた。昨年にトイレと休憩所をつくったら、たくさんの遍路に感謝されたので、この遍路小屋をつくって通夜ができるようにしたという。

小屋には囲炉裏もあり、寒いときには遍路といっしょに芋を焼いたり、湯をわかすらしい。なんか、朗らかに迎えてくれるおばあさんの横で、疲れた遍路がほどけるようにホッとしていく様子が見えるようだった。

おばあさんは遍路たちの感謝に応じて、小屋の少し上にある自宅の部屋さえも解放することを考えているらしい。その自宅の壁には、息子さんによる大きな母と子の遍路の絵が描かれていた。

母親が遍路と接する事で元気になっていくのがうれしくて、週末ごとに高知市からもどってきて、小屋をつくったり修理してくれるという。息子の母親への愛、そして遍路への思いやりがこもった遍路小屋なのだった。

でも、息子さんがインテリアのつもりで壁にかけておいた三つの笠が盗まれたり、はっておいた錦の納め札が盗まれたりと、いろいろあるらしい。悲しいことだ。

やがて通り雨も過ぎていき、おばあさんにお礼を言うと出発した。

「少しあとを、お寺まで歩かせてください」

鈴木さんは、また私たちの後ろについて歩き出した。この切り出し方、絶妙な距離のとり方といい、どうしてこんなにきれいに物事を運べるのだろう。ムダにしゃべることもなく、3人で気持ちよく歩くことができた。

三十八番金剛福寺まであと200メートルぐらいになると、車道の両側にある防風林が、おおいかぶさるように低いアーチをつくっていた。海からの風の強さを感じさせ、孤独と荒々しさが、緑色となってアスファルトの上に浮かんでいるような道だった。

ところがアーチを抜けると一気に、人、人、人。秘密の扉を開けたようで、ここにはあのわか雨すら降らなかった感じだ。

さすがに5月3日。足摺岬は、人でいっぱいだ。オートバイ、自転車、車、歩きと、ありとあらゆる手段でやってきた人たちでごった返し、みんながみんなしてソフトクリームを食べているように見えた。

お寺は岬のすぐ近くにあり、仏陀の誕生日を祝う花祭りをしていて、門前には屋台まで出ていた。海音だけの寂しい道を歩いてきたせいかな、この人ごみがひどくうれしかった。

ユースも兼ねている宿坊は、今日は満室。団体の遍路の名前が、「……様ご一行」と玄関先にいくつも出ていた。こんな日に私たちを泊めてくれるなんて、ありがたいことだ。

電話の女性は、今日は宿坊の入口でテキパキと事を運んでいて、「がんばってくださいね。歩きは、無理をしないことが一番です」

励ましてくださった。どうも、お寺のお嬢さんのようだ。鈴木さんも今日はここに泊まるのでいっしょにチェックインしたが、予約はずっと前に入れたらしい。

私たちの部屋は10畳ぐらいの和室で、荷物を置くと、また外に出た。観光レストランでざるうどんを食べ、お寺を撮影してまわったのだが、人混みを懐かしく感じたのもほんの数時間で、すぐにうんざりして宿坊に引き上げてしまった。

宿坊のドアのところでは、1匹の犬が寝ていた。白っぽい犬で、おとなしそうな表情で寄ってきたので、二人でなでた。夫が大きな手で耳の裏をかき、私が背骨のマッサージをすれば、目をとじて眠り込みそうになる。

そこへ、お寺のお嬢さんが通りかかった。この犬は「シロ」という名で、今はお寺に飼われているが、かつては安宿からこのお寺まで遍路を案内して歩いた、有名な遍路犬だったという。

心臓が弱っていて、昨日に医者から、あと数日の命だと言われたらしい。眠そうなのは、そのせいだったのだ。けれど全く辛そうには見えず、観音様のように優しく清らかな顔をしたシロだった。

お嬢さんは、シロが庭の桜の木の近くをもう死に場所と決めていて、そこに行きたがっていると言って、とても悲しそうだった。

シロは、マックを思い出させた。17年間という自分のそれまでの人生の半分を、ともに生きてくれた家族のひとりだった。シロと同じぐらいの大きさだった。

老衰だったが、最後の数ヶ月は家族の気配を求めて真夜中も泣いて、20分おきのトイレやらで、24時間世話に追われた。「死んでくれたら楽なのに」という思いと「死なないでね。大好きだよ」という思いにはさまれて泣いた。

死ぬ数日前からは、美しい光線というか微細なエネルギー粒子みたいなものが、犬の体から抜けて上へ上へと昇っていくのが見えはじめた。どこかの星へと引きもどされていくかのようで、最初は目の錯覚だと思った。マックが最後の力をふりしぼって、家族一人ひとりに「キャン」と別れをつけて旅立った後にも、それは数時間は続いていた。

気味の悪いものではなく、むしろ月光の粒子のようにも見えて、もしこんな美しいものが犬の魂だとしたら、死の別れを泣いたりすることはおかしいように思えた。それなのに、涙が止まることはなかった。回復するには、2年はかかった。

ある晩、短い夢をみた。マックが車を運転して家の前にのりつけ、助手席には子犬が乗っていた。珍しいこともあるものだと、翌日に母に話をすれば、

「まあ、不思議。私も昨日の晩に夢をみたのよ」

マックが子犬を口にくわえて、家のドアのところをいたという。

一ヶ月後のお彼岸に、父母がマックのお墓参りにお寺に行けば、「もらってください」と子犬が入った箱があった。母はもちろん、手ぶらでは帰ってこなかった。

遍路犬シロが「桜の木」駅から極楽へと旅立っていても、シロからの紹介状を持っ

た犬が、必ずこのお寺に「贈られて」くるにちがいない。犬の世界も、人間を評価しているようだから……。

夕食の大広間は、ものすごい人でごった返していて、だれがどこにいるのかさえわからなかった。それは夜になっても同じで、部屋のあちこちから話し声が聞こえて、子どもたちは廊下ではしゃいで、親に叱られていた。

8時をまわったころ、もう宿のほうも落ち着いてきただろうと、お金を払いに1階のお嬢さんのところへ行ってみれば、鈴木さんと二人の女性遍路が支払いをしているところだった。私はつい最近になって知ったのだが、お寺は朝が忙しいので、会計は夜のうちにすませるのが遍路のマナーらしい。

「これまでたくさんの方の遍路の足を見てきたから、どんな状態か、足を見ればすぐわかりますよ」

お嬢さんは、それぞれの足を見た。30代の女性には、  
「無理をしないほうがいいけれど、かばいすぎですね」

20代の若い女性には、  
「もう少し、飛ばしたほうがいい。これから、どんどん勢いがついてくる。若い人はそうなのよ」

鈴木さんには、  
「靴が合っていませんね。でも、このツメがはがれて治ったところには、すごいことになります。ものすごいスピードが出てきます。再生してからが、勝負です」

「え～、でも明日には帰るんですよ」

鈴木さんは、ものすごく残念そう。  
「大坪さんの足は、血行が悪いですね」

すごい。その通りだ。

足が終ると、お嬢さんはそれぞれの顔をじっくりと見た。  
「聞きませんが、お遍路するには理由があると思いますよ。大坪さんたちには、景色への旅愁みたいなものがあるかもしれないけれど、若い女性が歩くからには、それなりに理由があるものです」

すると、それまで私の横で明るく笑っていた若い女性が、  
「そうなんです」

いきなり泣きくずれた。驚きで、自分の息が止まった。自分が盲目に思えた。ついさっき彼女とお風呂でいっしょになり、「ここに泊まれてラッキーでした～」なんて湯船につかりながら、朗らかに話をしたばかりだった。その人が今、嗚咽を必死で抑えて泣いている。

「遍路道は、供養の道です」

お嬢さんは彼女の背に手をやると、しっかりと言葉を選ぶようにして話をしてくださった。

「以前、お子さんが自殺された方が遍路をされていましてね。最後に見たときは、路上に倒れている姿だったそうです。それで、どうしてももう一度わが子に会いたい、その一念でまわっていたんです。」

ですから、『遍路をしている間に必ず会えます』って言ったんです。本当に、この道はそういう道なんです。疲れて意識が朦朧としているときに、会えることが多いと聞いています。

しばらくしてから、その方から『遍路道で会えました』といって手紙がきました。夢の中で会えたそうで、後ろには般若心経が文字と音声で流れていたそうです。

この道は、そういう道なんですよ。そして遍路であるみなさんは、仏様として人から接してもらえありがたい道です。

でも、これは現実ではない。だからこそ、この夢をできるだけ長く楽しんで歩いてください」

若い女性は話を聞きながら、しゃくりあげそうなのを抑えていた。その彼女を抱くように、お嬢さんはささやいた。

「泣かないでね、笑って」

四国では、若い遍路ほどよくお接待を受けると聞いた。

「こんな若さで……」

地元の人が何かしら事情を察したり、自分たちの孫の姿を、若い遍路に重ねるかららしい。

逆に私は、お接待をしてくれる老人を見て、祖父母を思い出す。東京と九州で離れていて、ろくに会話もできなかった祖父母がなぜか懐かしくてしょうがない。

もしかして歩きながら、自分の心が祖父母を供養しているのだろうか。供養って、そもそも何なんだろう？

会計が終わって部屋にもどるとき、鈴木さんが言った。

「お二人と歩けて、いい思い出になりました」

「こちらこそ、ごいっしょさせていただいて、本当に光栄でした」

私も一礼した。彼こそ、今日はまちがいなく私にとってのお大師さまだった。

# Chapter 3 Ehime

## Day 37 一筆書きの二重柿

朝、ホテルの外を雑種の茶と黒のまだらな犬が、おじいさんを引きずりながら歩いていた。犬と人間の関係は、どこでも同じだな。

今日は、内海から山を越えた。柏から大門まで3時間かかる柏坂へんろ道だ。徒歩専門のハイキングコースのような細い山道で、最初の1キロぐらいはかなり急で蒸し暑く、虫もひどかった。

標高400メートルの柳水大師堂まで上がって、まず一休み。

この休みがよかったらしく、体が楽になって470メートルまで登ると、次の清水大師堂にあっという間に着いた。ここには、伝説が残っている。

「ある女性遍路が、ここで脱水症状になって倒れてしまった。ところが目を開けると、なんと空海が目の前に立っていて、『木の根元を掘るように』と言うではないか。そして掘ってみれば、あ〜ら不思議！水が湧き出たのでした。めでたし、めでたし」

でも、その場所ってどこだろう？ わからなかった。

このあと少し歩くと、いきなり視界が開けた。つわな奥展望台だった。木立の間に突然にひらけた世界は、まるで眉間から広がっていくような空間だった。由良半島の先に見えるのは、大分か？ 地名なんて知りたくもないほど、新天地に見えた。

薄ぐもりの光のなか 山々の尾根は  
さざ波の海に浮かんで連なり  
入り江は一筆で描かれ  
なめらかに湾曲して静か

あの一筆の中に  
何億もの生き物がいる

遍路をして やっとわかってきた

あの一筆の中で  
何億もの生き物が声を上げている

下りの途中の茶堂で休んでいると、若い僧侶が反対側から登ってきた。僧衣姿にリュックを背負い、息を切らしてやってくる若き修行僧。見るからに利発そうで、覇気があ

った。家に帰ればジーンズをはく青年たちとわかってはいても、青年僧をみるたびに、空海もこんな感じだったのかなと思ってしまう。

このヤング弘法大師は、リュックを地面に置くと、托鉢用の鉢とお杖を持って凜と立ち、これからも登るであろう坂を見て言った。

「この先、まだありますかね？」

「ええ。まだ結構ありますよ」

「はあ？」

よほどがっくりきたのだろう。いきなり気抜けして、茶堂のベンチにヨロヨロと倒れるように座ってしまった。その落差の大きいこと。

高野山派ではないけれど修行中。四国遍路は、必修ではないらしい。

「やる人もいれば、やらない人もいますよ」

何でもないことのように言ったが、初めての遍路道でいきなり逆打ちをしているところを見ると、遍路にかける意気込みは大きいにちがいない。やっぱり、夢があるんだろうなあ。この時代のお坊さんの夢って、どんなものなんだろう？

「どうか生臭坊主だけには、ならんでください」

四国のおばあさんのように、彼に言ってみたくなった。

2日前にお財布を落としてしまい、今はお布施のお金でしのいでいるという。

「や～、毎日、屋根の下で寝られるとは限らないですよ。お寺が冷たいのには、驚きました。明日には実家に電話を入れて、お金を送ってもらうつもりです」

私たちはさっそく、昨日会った遍路から教えてもらった善根宿や野宿ができる場所を教えた。

「あの、あなたの写真を撮らせてください」

夫が頼むと、

「はい、どうぞ」

スッと立ち上がって、胸元など居住まいをサッと整え、

「こんなもんかな」

さわやかに夫の方を向いた。現代っ子というか、屈託がない。私たちの世代のしがらみも、「そんなもんですかね～」と軽く飛び越えていきそうだ。

今を精一杯に自分なりに生きているって、若さだろうか？ 人格だろうか？ 心のなかの目標がそうさせるのだろうか？ それとも、肉体という道具には限りがあるということ、この青年はすでに身につまされるようにして知っているのだろうか。

「じゃ！ お気をつけて」

案の定、風のごとく、彼はものすごい清涼さで去っていった。峠の道で若き僧侶とすれちがい、言葉をかかわして別れていくなんて、遍路道でないとありえないこと。

「いいな～、あの切れるような軽さ」

緑の中へ姿を消していくヤング弘法大師のうしろ姿を、どこか羨ましい気持ちで見つめた。ところが急に、彼に現金のお接待をしなかったことが、後悔の念となって心に広がった。これまで食べ物はお接待してきたが、現金はしたことがなかった。考えたことすらなかった。なぜ、今になってこんなことを思ったのか？

もしかして……、空海、なんか耳元でささやきました？

茶堂からの道は、おとぎの国のような風景だった。緑とツツジの花が交じり合う道を下り、ポツンとある家の横を過ぎて、ビニールハウスの横にいた犬とおばさんからジュースをいただき、だんだん畑を抜けて……。緑に包まれた午後だった。

山間の里を抜けて、やっとまた56号線に出たところのうどん屋では、カレーライスとお饅頭のランチをとった。

出るときに、お店の女性が水筒に水だけでなく、氷まで入れてくれた。水筒の中でシャカシャカと音をたてる小さな氷が、遍路の心の中では、大氷河も溶かすほどの熱い感謝の気持ち呼び起こすということ、彼女は知っているのだろうか。

ここから満願寺まで、また山登り。麓の農協で、今夜の夕食を買いたした。この町は、遍路にとっても感じがいい。大人も子どもも、挨拶をしてくれた。

川をわたり、道は急なカーブを描いて続き、果樹園が尾根の上に広がっていた。谷間を下り、屋台のたこ焼き屋の前を通過し、囲いの中の大きな牛を見ながら過ぎて、4時に満願寺に着いた。

奥さんが私たちの顔を見ると、笑顔でおっしゃった。

「布団を干しておいたから、本堂で寝てください」

どうしよう。時にはカビ臭い布団、シーツすら変えていないと思われる布団に寝てきた身にとっては、干した布団など身に余る……。それに、今朝になって電話でお通夜をお願いしたのはこっちだ。鐘撞き堂ぐらいでもありがたいと思っていたのに、本堂。しかも、行ってみれば畳だった。

本堂の仏様に背を向けて、奥さんと暮れていく境内をながめた。カエルの声に、犬の遠吠えがする。石仏が6体、私たちを見ていた。

「この寺に来たら、こうするのが一番よ。イノシシ、ムカデ、なんでもこの裏山にいるわよ。野ネズミもね。田舎の山寺よ。」

お堂に座って、こうして庭のほうに足を投げだして、ぼーっとながめるの。みんな、『ホッとする』って言うわ。法事のときだけしか人が来ないような寺はダメよ」

秋にはイチョウの葉が散って、この庭いっぱい、ジュータンのように広がる。それを見ながら、茶会を催すらしい。

「イチョウの葉って、クルクルまわって落ちてくるの。なるべく遠くへ行こうとしているみたい」

遍路の心をなごませてくれた奥さんは、詩人なんだな。お寺の宿坊でのお話よりも、しみ込んでくるものがあつた。人間のことばかりに集中する話よりも、自然の豊かさや大きさに心がカパッと開いて、そこから光が射してくるような気がした。

「猿もくるし、イノシシもくるの。猿なんて、庭の渋柿を投げつけるのよ。境内には、ほかにも柿があつてね」

奥さんが、私の目を探るようにしておっしゃったので、それに応えるように聞いた。

「二重柿というものですか。お寺に着いたときに、柿の木の根本に肥料をあげていたおじさんがいて、『接ぎ木しても、接ぎ木された木には、なぜか二重柿にならない。不思議だ』って言っていました。樹齢が300年から400年もあるって聞きましたけど、いったい

どんな実がなるんですか？」

二重柿とは、柿の中にもうひとつ、柿がなるそうだ。その形態から「子持ち柿」と呼ばれ、子宝の靈験があるとされ、県の天然記念物に指定されている。テレビにも出るほど、有名な柿の木らしい。

「時々ね、柿がほしいといって電話してくる人がいるので、冷凍してあるの。ひとつどうですか？」

奥さんが、私にすすめてくださった。おそらく夫婦で遍路をする人の中には、子宝を求めている人も多いのだろう。私たちのことも、そう思ったのかもしれない。だから私を思いやるような優しい表情をして、二重柿のことをおっしゃったのだ。ありがたいことだった。でも、本堂に泊めていただいただけで十分。

夫は私たちの会話を聞きながら、ニコニコして境内の方を見ていた。お堂で寝れるなんて、最高の文化経験らしい。日本人として気骨が折れるようなこっちの思いは、わからないようだった。

そうこうしているうちにご住職ももどられて、わざわざ挨拶にいらした。ますます恐縮。臭い遍路が、本堂に寝るというのに……。

このお寺は、八十八ヶ所でも二十の別格霊場でもないが、地元の古い資料によれば800年以上も前からの遍路の札所だという。現在では、お参りする遍路は年20人ぐらいで、お通夜をしていくのは一人ぐらい。外国人青年が、お通夜をしたこともあるという。

ご住職は、高校の教師も兼任されていた。僧侶が教職についた場合、生活指導はどんな風になるのだろうか。不良に対してはもとより、親に対してもどんな言葉を使って指導をするのだろうか。「お大師さま」という言葉は登場するのか？

日が暮れると、早々に布団にもぐりこんだ。太陽の光を吸って、ぬくぬくしていた。

「お寺って、そもそもなんだろう？」

考えていると、夫がつぶやいた。

「なんか、ここ、神性だな～」

当たり前だ。県の重要文化財でもある観世音菩薩像に、頭を向けて寝ているのだから。

## Day 55 三角寺、今昔ものがたり

新しい靴は、柔らかくていい。何よりも足元の赤色をみると、元気が出てくる。夫にも、赤い靴がいるかな？

標高500メートルにある六十五番三角寺への道は、地図で見たよりも長く感じた。山道や竹林を抜けてどんどん登っていったのだが、着いてみれば全くシンプルというか、観光地化されていなくていい感じの寺だった。ただ50人ぐらいのバス遍路と到着がいっしょになり、朝の静けさもなんのその。

納経をしてくれた若い僧侶によれば、このお寺で空海が三角護摩をたいたという。この山が悪霊だらけで、それを封じ込めるためだったらしい。今でも山には龍がいたとか、さまざまな説があるという。

三角護摩をたいた場所は、現在で言えば池のあたり。弁天様が、祭られている。弁天様は三角護摩とは無関係だし、三角護摩は何かを封じ込めるために使われたものなので、今は禁じられているらしい。

また、お杖に書かれている五文字は「空風火水地」で、かつてはお杖を、行倒れ遍路の墓標がわりに立てたという。

「だからお杖で、あそこ、ここ、とか場所を指す人がいますが、あれはダメなんです。また、この山は霊之山とか明治ぐらいまで言われていたので、そんな感じだったんでしょね」

こちらは内心、「霊之山か……」とワクワク。実は大山さんから、この山についてのおもしろい話を聞いていたからだ。彼も、修行してまわっている遍路から聞いた話だが、その人がテントをこの山に張ろうとしたときだった。

「まだ上に行ったらどうか？」

ささやくような声が出た。それでちょっと登ってテントを張ろうとすると、

「まだ上に行ったらどうか？」

また同じ声が出る。仕方なく上に行くと、

「まだ上に行ったらどうか？」

不安になりながらもさらに登ってみれば、なんと小屋があった。結局、小屋の中で寝たのだが、真夜中からいきなり集中豪雨がはじまって、しかも3日ぐらい続いたという。「あの声が無かったら、もともとは谷沿いにテントを張ろうとしていたので、水に流されて命が危なかったかもしれない」

そう大山さんに話したという。これぞ現代の民話かな。

またささやいた霊の「……してはどうか？」という、霊にしては謙虚な言い方もいい。「それならば、そうしようかな」という気になる。

悪さをする霊だとは思えないけど、やはりこのお山は、今でも不可思議の世界に足を半分突っ込んでいるのかもしれない。

「あの、何か霊を感じますか？」

納経所の僧侶に聞いてみれば、

「さあ、私は感じませんが」

無関心なように答えたが、ちょっと間をおくと、

「私自身が、悪霊かもしれませぬよ」

口だけニッと曲げた。

この瞬間、夫はこの僧侶が大好きになってしまった。

かつては悪霊だらけのお山にある三角寺だが、今朝の風景は平和そのもの。空海が三角護摩をしたという池の近くのベンチでは、男子学生2人が寝袋から半分だけ身を起こして、寝ぼけ眼で日記をつけていた。

自転車旅行をしているようで、昨夜はここで野宿をしたのだろう。先輩と後輩らしい。後輩の枕元にはポップコーンの巨大な袋があり、時々それをつかむと、ビールの

大ジョッキみたいに袋ごと口に傾けて食べていた。

「観らん車の『らん』って、どう書くっけ？」

先輩が聞いた。

「展覧会の『覧』です」

ポップコーンの袋を置いて後輩が答えれば、

「ようわからん」

先輩が恥ずかしげもなく言い、

「ご覧になるの、『覧』です」

言うなり、後輩はまたポップコーンを飲みはじめ、

「なんとなくわかった」

先輩がペンをノートに走らせた。おい、いったいどんな字を書いたんだい？

日本のスーパーヒーローなる空海が、渾身をこめて悪霊を封じ込めたであろう場所で、今は若者たちがこんな会話をしている。これから1000年後には、どんな生物がどんなことを、ここでしているのだろうか。

それにしてもこの青年たち、いったい四国のどこで観覧車なんて見たんだ？

三角寺もいいお寺だったが、ここの奥の院であり、また別格十三番でもある仙龍寺が、なんといっても今日のハイライトだった。

三角寺からコンクリートの車道を歩くこと2時間30分。かなり上り下りがあったが、裏道のような林道で、美しい緑を満喫した。秋は、さぞかしきれいな道だろう。

脇に座りこんでキットカットとバターロール、チーズを食べたが、道のど真ん中に座りこんでお昼を食べられるぐらい、車の通りも遍路の姿もなかった。

奥の院は、風情があるみごとな構えの寺だった。よくぞしっかりと保存してきてくれたと、お礼を言いたくなるようなお寺だ。遍路道のお寺のなかでは、一番好きな建築物かもしれない。古い部分は200年以上も前のもので、崖をうまく利用してつくられている。

「廊下ばかりあって、部屋は少ない」

納経所の僧侶が言った。30代か40代だろうか。夫に英語の本をお接待し、いろいろと話をしてくださった。阪神大震災のあとは、2年かけて八十八ヶ所を仲間と托鉢してまわり、集まった70万円を藤本義一さんに届けたという。

「遍路をして歩くと、点と点がつながって線になる。疲れて横になって見る雲の流れ、鳥の声、川の音、見過ごしてきた自然の営みかもどってくる。気づき直す。それが、大きかったな。

自然は繰り返しているようだけど、毎日ちがう流れ。変化をしている。時間は本当に貴重で、尊いものだとわかったよ」

この人こそ、なんて尊いことを言ってくれるのだろうか。ほんと、同じことを繰り返しているものなど何もない。そんな当たり前のことが、遍路をして歩くと体でわかってくる。変化が当たり前で、変化を恐れる気持ちが薄らいでいく。

最近、ヘリコプターでお四国巡りをする企画もあったらしい。お堂の上空でホバリングしてみんなでお経を読み、納経帳は下りたときには記入済みになっているという企画

で、3日間で八十八ヶ所をまわれるという。

「遍路は、車のお接待も受け入れる心を持つことは大切だと思うが、こんな企画をお大師さまはどう思われることやら……」

僧侶は、戸惑いを隠せないでいた。当たり前だわ。遍路道レジャー化の公式宣言も同じだ。なんにもそこまで露骨にしなくても……。

いろいろなことを座って話しこんでいたら、参拝者がやってきた。

「納経をしてもらえますか？」

「納経は、参拝したお礼にするものですから、先に参拝してください」

僧侶は柔らかな声ながらもはっきり言うと、またこちらを見てお話を続けてくださった。なんか、いい。

「お大師さまは、『心の中に天あり』と言っているから、外のものを拝むのはおかしいかもしれない。でも、お大師さまのあとを歩かせてもらうだけで、何かありがたいことが起こる。無心に歩いているから、からっぽになっているから、何かが入ってくるのかもしれない」

お話を伺っていて、うれしくなってきた。遍路道のように、ただ歩くことを許してくれる環境があることは、とてもありがたいことなのだ。

それに、この僧侶は僧衣ではなくて、白いポロシャツを着ていた。そのアウトドア的で、ラフな姿から語られるお話は、説法臭くなくて、自然界の風のように。でも、逆に言えば、僧衣なしでもこうした感銘を何気に人に与える話ができるということこそが、日々の修行の賜物なんだろうな。カッコイイな。

私がやっと靴を見つけた話をすると、僧侶は遠慮げみに言った。

「ぼくはテニスシューズだったが、一日でダメになったよ」

奥の院から別格十四番椿堂へは、4キロの道。軽い登りで、お互いを押しあう。

椿堂は小さなお寺で、本来は森の中で清らかさを保っていなければいけない奥の院が、わざわざ町に出てきてくれたようで、小さな宝石といった感じだ。

アメリカ人の友人が1994年に、ご住職と楽しい一夜を過ごした寺でもある。そのご住職は退職され、今は30代の若いご住職になっていたが、大師堂の横にある建物の2階の小さな部屋が、今も遍路のお通夜に提供されている。

部屋は清潔で、置いてある前泊者の宿泊ノートには大山さんの名前があった。やはり、私たちの前を歩いているようだ。

このノートにある走り書きが、また励みになる。おかしいのは男性遍路がみんな、椿堂の奥さんがいかに美人かを讚えていることだ。わびしい一人歩きのなかで、天女にでも会ったような気がしたのだろう。

実際、本当に美人だったので、私も思わずノートに書いてしまった。美しい女性は、それだけで癒しになるものなんだなあ。こんなに毎日、お饅頭ばかり食べていないで、自分ももうちょっと外見にこだわろうか……。まあ、東京にもどったら考えようかな。

夜も、10時をまわった頃だった。突然、外に車が止まり、人の声がした。おばさん一人とおじさん二人がお寺に転がりこんできて、

「どうか泊めてくださいよ」

声を上げて騒いでいる。車の遍路か観光客かはわからないが、たちが悪そうだ。夜遅くにわざとやってきて、仏像とかが置かれている大師堂の中に泊まり込もうとしている。

「こんな時間に……」

ご住職が出てきて困っているのに、

「泊まる場所がないんですから、いいじゃないですか。泊めてくださいよ」

女が言ったかと思うと、

「あ～、もうほんと、ありがたい、ありがたい」

「それに、もうこの時刻ですから、ねえ」

男たちが追い討ちをかける。3人ともわざと朗らかにふるまって笑い、相手の怒る気をうまくはぐらかしていた。プロか？ 怖い相手だ。

そのうちに静かになったので、居座って大師堂に泊まったのだろう。なんか、小説「レミゼラブル」のジャンバルジャンと牧師を思い出した。

(2005年に訪ねたときは、通夜堂は事情により閉鎖されていた)

# Epilogue

菅笠の下から見つめる人  
喜びが 優しさとなって伝わってくる  
遍路道なんだから  
夢の中ででも空海の姿が見られるかもしれない  
そんなことを期待しながら歩いていた  
でも気がつけば その瞳が目の前にある  
その人に触れることも 話すこともできる

現在住んでいるメイン州は、アメリカ東海岸のカナダと国境を接する北端にあり、人口の98%が白人で、アジア人の姿はほとんどありません。春から秋までは軽井沢のような気候が楽しめますが、冬は氷点下20度を下回ることもあり、冬の寒さには厳しいものがあります。

ところが、そんな所においても四国の遍路道の風景が重なってきて、心がなごむことがあります。富士山が太平洋を隔てたところにあるにもかかわらず、目を閉じればまぶたに浮かんでくるのと同じような感覚でしょうか。

「お遍路さ〜ん」と呼ぶ声が聞こえるような気がしてきたり、何気ない人のしぐさや様子など、小さな思い出がよみがえってきます。

忙しく競争に満ちた世界だからこそ、ただ歩くことを許してくれるだけでなく、見守ってくれる道があり、しかもそれが母国にあったことは、本当に幸いなことでした。

遍路道は、不思議な道でした。今にして思えば、過去と現在、未来をいっしょに体験しながら歩いていたように思います。

「あっ」という気づきの電光が、怪しい霊能者によるチャネリング、ヒーリング、予言といった異常体験からではなく、自然や人びとを通してごく日常的な姿をもって現れます。

そのせいでしょうか。家路についても精神がバランスをくずすことなく元の生活へもどることができました。遍路道がもつ深い智慧のおかげだと思えます。

遍路道が、「慈悲から生まれた世界人類への遺産」であり、四国の心ある人びとによって守られてきた奇跡の道だといっても、実際にそれを体験した自分にとっては言い過ぎだとは思いません。

最初の1周をした1998年の話をさせてもらえば、テレビの影響もあり、歩いてまわる遍路が増えてはいましたが、その多くはバブル崩壊で仕事を失った人や、早期退職をした人たちでした。

山道は草ぼうぼうのところが多く、ベンチやトイレも少なく、ケイタイも接続が悪くて使えず、公衆電話を使うことがほとんどでした。

今でこそインターネット上には、遍路道の写真、動画、奥の院情報などがあふれていますが、当時はほとんどなくて、へんろみち保存協会が1990年に初版した地図の第5版をたよりに、行き当たりばったりの巡礼の旅を始めたのです。

ところが2002年から区切り打ちで歩いてみれば、レストラン、コンビニだけでなく、トイレ、通夜堂、善根宿まで増えていて、とても便利な状態になっていました。

そえみみず遍路道など、古い遍路道の藪ははらわれ、樹々は所々が伐採されて、海や眼下の町を一望して休めるようなベンチまで置かれていました。松尾大師や東洋大師などはみごとに再興されていて、最初は目を疑ったぐらいでした。

また若者たちが、野宿ができるお堂や場所、善根宿が書かれた一覧表を持って歩いていました。地元の人が作ったらしく、書かれた場所をたよっていけば、ほぼ宿代は無料で八十八ヶ所をまわれるそうです。

若い人こそ経験してほしい遍路道なので、これらはとてもうれしいことでしたが、その一方で四万十川の渡し船がなくなったり、高速道路建設のために史跡が別な場所に移されていたり、お寺の上を高速道路が走っていたりしました。史跡、文化財の保存はもとより、その生かし方では、日本がどれほど他の先進国から遅れをとっているかを痛感し、残念でなりませんでした。

最初の1周から18年、最後の1周から10年たった今、私たちの私生活も変化し続けていますが、日記をまとめ終ってみて、つくづく遍路道ではいろいろなことが心の中に「種」としてまかれたということに気がつきました。

遍路道からもどってすぐに日記を編集していたら、同じことを書いていても、響きのちがったものになっていたかもしれません。

50代になった自分たちにとって、30代での遍路道の経験で一番役に立っていることは何かといえば、最初の1周を連続して歩き通す「通し」でまわったことだったように思います。

人の一生が40歳だとしたら、20歳になれば、「あと半分しかない……」と、惜しむような余裕が心に生まれるでしょう。

でも一生が90歳だとしたら、40歳になっても、「あ～、まだ50年も先がある。半世紀たっても、自分は生きているかも。そんなこと、あり得るのか？ いったいどうなるのだろう？」と、不安が常につきまとい、心の中はざわつくものです。

通しで歩くことも、全く同じでした。歩くことからくる疲れと、一度も歩いたことがない道に対する不安が、予想以上に大きかったのです。

健康やお金の心配などがそれに加わって、アメリカに比べたらはるかに安全な国内の道にも関わらず、不安はおかしなぐらい膨れあがり、常に自分を引きずろうとしていました。

そんな心を手なずけるために、肉体を無理せずほどよく使うことで、常に心に余裕を残しておくことが大切でした。

「自分はこれでいいんだよ。大丈夫なんだよ」

そう言いかせることができるかどうか……、これが、遍路道から学んだことでした。また実際にそうしていれば、なんとかなったものでした。

1999年に反対まわりの逆打ちで1周したときは、少し物足りなさが残りました。多くの人が順打ちをしているせいなのか、順打ちのほうが結願したときに、心が落ち着きました。

ただ、逆打ちのすばらしいところは、順打ちでまわっている数々の遍路と会えること。さまざまな人たちが、ともに道にあることに驚かされました。

たとえば、こちらは毎日4人ぐらいの順打ちの遍路とすれちがっているのに、20番台のお寺になっても、全く歩きの遍路と会うこともなく、一人で心細く歩いていたおじさん遍路に会ったことがありました。

自暴自棄になって、靴を脱いで道の傍らに座りこんでいたその人に、「たくさんの方が、すぐ前を歩いていますよ」と言えば、「そ～なんですか？ いったいみんなは、どこにいるのかと思っていましたよ」肩の力がどっと抜けて、安堵した表情を見せたのを覚えています。

人生も、こうして逆からのぞけるチャンスがあったら、どんなに安心して歩めるのか。逆打ちも経験して、本当によかったと思っています。

また、1周目に出会った区切り打ちの人たちと、2周目、3周目で再会することがありました。しかも再会する数分前に、お互いのことを「ふと」思い浮かべていて、「いや～、これはたまげた！」

生身の人間の出現に、声を上げて驚いたものでした。不思議ですね。

お接待は、頂いても、自分でしても、自覚が新たに生まれ変わるといふ、一言では言いあらわせないほどに心をゆり動かすといふか、揺さぶる機会をくれました。

浅ましきか、物をただでもらうと最初はうれしいのですが、高知に入るころにはすでに慣れてしまうのです。お接待の力を知ったのは、そのあとでした。

疲労がたまり、クサクサした気持ちになっているところへお接待を頂くと、人が人間を超えたところにいる「空海」を見ている意識の存在が感じられるようになり、うれしいのです。そこをともに生きているということが、うれしいのです。

疲れていても、へこんでいても、人はそんな自分ではなくて、ともに歩んでいる絶対に疲れない空海を見ているということがわかり、自分を超えたものにつなげてくれるようで、何よりも励みになりました。

それは、自分がお接待をしても、同じことでした。「お気をつけて」と言って別れていく遍路たちに、自分と同じ空海がいる。彼らにお接待をすることで、遍路なる自分を思い出しました。大きな存在の一部へと、飛翔させてくれるような気がしました。

助け合うとは、人と生きるとは、人間社会とは、本来はこういうものではないかとさえ思いました。そこには、「和と個」が、「思いやりと自立」がみごとに共存しているように感じたからです。

もちろんそれを可能にしているのは、遍路道における空海が、死しても高き点を人

間に示して今に在り、ヒーローを追ってみんなが競い合うというのではなく、「みんなが、お互いの中にその姿を覗ようとすることによって、いっしょにシフトしよう」という広い視野と希望、力を人々に与えているからだと思います。

空海が偉大な人であったからこそなのでしょうが、私のように真言宗を知らない人間にとっては、むしろこういう存在にまで1200年以上という時をかけて、空海を守り育ててきた人たちの、「よりよく生きていこう」とする意志に頭が下がります。そしてこの意志の源への好奇心と信頼が、ますます強くなっていきました。

もちろん日常生活にもどったら、みんなが様々なことに心の焦点を合わせていて、空海という中心点はありません。お接待と同じ視点で人と交わることは、それこそムチャというか、至難の技に思えてむなしい気もします。

でも、久しぶりに遍路日記を読みかえてみて、いろいろなことを感じてわかったように書いておきながら、ほとんどのことを忘れていた自分がいることに苦笑してしまいました。遍路道を日常にもってこられないのは、もしかしたら、同行二人的意識が自分の内ですら習慣化するまでの運動エネルギーとして蓄積されていないだけという、単純なことに過ぎないのかもしれない。

ましてや社会に自然と働くようになるには、たくさんの方のチャレンジによる膨大なエネルギーの蓄積があってこそなのでしょう。

今からでも日常生活の中で個人的に再チャレンジができ、またする価値のあることのように思われるので、本の締めくくりにあたって、遍路道からもどって翌朝自宅で目覚めたときに思ったことを、日記から抜粋して書いておこうと思います。

また体を使って実践できるように、今後の目標としたいと思います。

## Day 76 晴れ

遍路道では、神も仏も、道ばたの草ほどに自然に生きていた。生きる姿勢を人間が問いつづける限り、遍路道は残るだろうなあ。奇跡だな。

「ありがたや 高野の山の岩かげに 大師はいまだ おわしますなる」

高野山のご詠歌にはこうあるけれど、その岩場は各自の心の中にあり、そこから私たち自身を通して出番を待っているということか。

「慈悲とは、人のためにいいことをしたいという責任感にも似ている」

ドラマが講演の中で言っていたけど、なんか似ている。

まずはお杖を、いつも見えるところに置こう。「物」は本当に大切に、生き方とつながりの深いものだと思った。お杖によって、物が大切なことを常に思い出させてくれる道具、意識の道具へと転換したような感じがする。まるで、大切な人の写真のようだ。

道具に「道」という文字がついているのは、意味があったんだな。いい物をつくることを助けるどころか、意識の「道」から作ってくれるとは思わなかった。遍路「道」なんて、

もしかしたらその最たる例かもしれない。

日常生活の中にある鉛筆やお湯のみ、洋服、家具、布団など、自分のまわりの小さな物もみんな道具であり、意識を調律し、命を生かす大事な存在になってくれるのに、なぜこの力を生かしてこなかったのだろう。逆に振りまわされていた。

神社やお寺に行って祈るという習慣がある国に生まれ育ってきたのに、どうして日常の小さな物たちに対しては、それを同じぐらい実感することができなかったのだろうか？  
へんだ。

もう、たくさん物は必要ない。節約とか整理という理由じゃない。セドナにいたときも、不要なものを捨てまくり、冷蔵庫のコンセントまで抜いて暮らしたことがあったけれど、逆にシンプルに暮らすことにとらわれてしまった。振り子のように、意識が「獲得、ゲット」することから反対側の「放つ、捨てる」ことに大きく振れたにすぎなくて、心の中の欠乏感が消えることはなかった。

でも、今回はちょっとちがうかもしれない。豊かさは、潤い。だからこそ、自分の意識を大事な思いとつなげてくれる道具だけを持ってばいい。もしかして、あのみっともない菅笠とお杖のおかげで、生まれて初めて物が見えてきたかな。

物というよりも、自分がその物から連想している「もの」、その物に投影して自分が見ている「もの」……、その「もの」の質こそが大切なんだわ。本当に、内も外もないんだな。

どうして、こんなことをしている？  
もう帰ろうか……

そう思いながらノロノロ歩いて、  
終わってみればちがう。

何がちがうのかはわからないけれど、ちがう。

すれちがう人たちに、  
「どうぞ、お気をつけて」と微笑みたくなる。

# 旅程一覽

## Tokushima

初日前：民宿つしまや

- Day 1：1番靈山寺 2番極楽寺 3番金泉寺 愛染院（三番奥の院） 4番大日寺 5番地藏 別格1番大山寺 6番安楽寺（宿坊）
- Day 2：7番十楽寺 8番熊谷寺 9番法輪寺 10番切幡寺 ビジネスホテルオイケ
- Day 3：11番藤井寺 長戸庵 柳水庵 浄蓮庵 12番焼山寺（宿坊）
- Day 4：建治寺（宿坊）
- Day 5：13番大日寺 14番常楽寺 15番国分寺 16番観音寺 17番井戸寺 大鶴旅館
- Day 6：18番恩山寺 19番立江寺 星の岩屋（通夜）
- Day 7：別格3番慈眼寺（通夜）
- Day 8：灌頂の滝 民宿金子や
- Day 9：20番鶴林寺（宿坊）
- Day 10：21番太龍寺 龍山荘
- Day 11：22番平等寺 月夜御水庵 明山荘
- Day 12：田井の浜 泰仙寺(23番の奥の院) 23番薬王寺（宿坊）
- Day 13：別格4番鯖大師 民宿大安食堂

## Kochi

- Day 14：佛海庵 まるたや旅館
- Day 15：東洋大師 御蔵洞 24番最御崎寺 うまめの木
- Day 16：25番津照寺 不動岩 26番金剛頂寺（宿坊）
- Day 17：四十寺 26番金剛頂寺（宿坊）
- Day 18：中山峠 ドライブイン27
- Day 19：27番神峯寺 神峯神社（27番奥の院） サイクリングターミナル
- Day 20：28番大日寺 善根宿の都築家
- Day 21：29番国分寺 毘沙門ノ滝（二十九番奥の院） 30番善楽寺 駅前ビジネスホテル
- Day 22：31番竹林寺 32番禅師峰寺 高知屋
- Day 23：33番雪蹊寺 34番種間寺と奥の院 弥勒大明神 35番清滝寺 喜久宿
- Day 24：36番青龍寺 不動堂（36番奥の院） 国民宿舎土佐
- Day 25：仏坂不動尊（岩不動） ビジネスホテルさつき
- Day 26：別格5番大善寺 焼坂峠 そえみみずへんろ道 37番岩本寺（宿坊）
- Day 27：高岡神社 内田や旅館

- Day 28 : 石見寺 丸三
- Day 29 : 四万十川河口 丸三
- Day 30 : 四万十川の渡し 真念庵 民宿久百々
- Day 31 : 38番金剛福寺 (宿坊)
- Day 32 : 白皇神社 (38番奥の院) 龍宮神社 某ユース
- Day 33 : 大浦公民館 (通夜)
- Day 34 : 月山神社 某ビジネスホテル
- Day 35 : 39番延光寺 あげぼの荘
- Day 36 : 佛眼院 40番観自在寺 ホテル内海

## Ehime

- Day 37 : 柏坂遍路道 満願寺 (通夜)
- Day 38 : 別格6番龍光院 (通夜)
- Day 39 : 41番龍光寺 42番仏木寺 送迎庵見送大師 (齒長峠) 道引大師 43番明石寺と奥の院白王権現 まちつ屋
- Day 40 : 43番明石寺 番外札掛大師 ビジネスホテルオータ
- Day 41 : 別格7番出岩寺 ビジネスホテルオータ
- Day 42 : 別格8番十夜ヶ橋 永楽大師堂 (通夜)
- Day 43 : 三島神社 ひわた峠 44番大宝寺
- Day 44 : せり割行場と45番奥の院 45番岩屋寺 民宿でんこ
- Day 45 : 三坂峠 網掛石大師堂 長珍屋
- Day 46 : 46番浄瑠璃寺 生目大師 47番八坂寺 別格9番文殊院と八塚 札始大師堂 48番西林寺 49番浄土寺 50番繁多寺 51番石手寺 道後ビジネスホテル
- Day 47 : 52番太山寺 53番円明寺 某宿
- Day 48 : 鎌大師 遍照院 青木地蔵 54番延命寺 某ホテル
- Day 49 : 55番南光坊 56番泰山寺 奥の院龍泉寺 57番栄福寺 58番仙遊寺 竹林寺 59番国分寺 あるお寺 (通夜)
- Day 50 : 道安寺 白井の水 別格10番興隆寺 あるお寺 別格11番生木地蔵 61番香園寺 (宿坊)
- Day 51 : 60番横峰寺 星ノ森 61番香園寺 (宿坊)
- Day 52 : 62番宝寿寺 63番吉祥寺 64番前神寺 石鎚山玉屋旅館
- Day 53 : メモリアルビル 五葉松旅館
- Day 54 : 別格12番延命寺 三幅寺 パークホテル三島
- Day 55 : 65番三角寺 別格13番仙龍寺 別格14番常福寺 (通夜)

## Kagawa

- Day 56 ~58 : 66番雲辺寺 別格14番常福寺 (通夜3泊)
- Day 59~60 : パークホテル三島 (2泊)

Day 61：阿波池田簡保  
Day 62：別格15番箸蔵寺 阿波池田簡保  
Day 63：66番雲辺寺 別格16番萩原寺 民宿おおひら  
Day 64：67番大興寺 琴弾八幡宮 68番神恵院 69番観音寺 70番本山寺 ふれあいパークみの  
Day 65：71番弥谷寺 73番出釈迦寺 捨身ヶ嶽禅定 72番曼荼羅寺 74番甲山寺 75番善通寺（宿坊）  
Day 66：別格17番神野寺 寿旅館  
Day 67：金刀比羅宮 76番金倉寺 77番道隆寺 78郷照寺 ビジネスホテルオマツ  
Day 68：79番高照院 80番国分寺 81番白峯寺（通夜  
Day 69：82番根香寺 別格19番香西寺 83番一宮寺 某宿  
Day 70：ビジネスホテルわかさ  
Day 71：84番屋島寺 85番八栗寺 86番志度寺 玉泉寺 あずまや旅館  
Day 72：87番長尾寺 胎蔵峰 88番大窪寺 民宿八十窪

### **Koyasan**

Day 73：6番安楽寺（宿坊）  
Day 74：1番靈山寺 高野山天徳院  
Day 75：高野山弘法大師御廟

# その他

## 著者略歴

**大坪奈保美** 大学卒業後、翻訳家、ライター、衛星放送局で詩人として働いたのち渡米。アメリカのメイン州で、夫William Ashとニューファンドランド犬Hikariと創作を継続中。Bates International Poetry Festivals 2011に招待され、自作の詩を読む。2014年に処女詩集「[乙姫から浦島太郎に告ぐ](#)」を出版。その他、主な訳書には、「インディアンの愛」(地湧社)、写真集「Tibet 光との出会い」(by Will) (地湧社)、「アマゾン」(偕成社)、その他。旅行記事掲載、マリクレール等。

## Hakusan Creation

William Ash と Naomi Otsuboによる、小さな independent publisher。  
アメリカの「バケーションランド」と呼ばれるメイン州の田舎から、メイン州の美しい海や森、湖、家のまわりの森などのインスピレーション豊かな画像や、日本の作品をブログで紹介したり、書籍として販売している。[www.hakusancreation.com](http://www.hakusancreation.com)

「**空海の人びと**」は、紙の書籍も含め4種類発売されています。

紙の書籍 (softcover) 横書き版 ISBN: 978-1-935461-06-7

紙の書籍 (hardcover) 横書き版 ISBN: 978-1-935461-07-4

電子書籍 (epub) 横書き版 ISBN: 978-1-935461-08-1

電子書籍 (epub) 縦書き版 ISBN: 978-1-935461-09-8

## 空海の人びと

著者: 大坪奈保美

初版第一刷: 2016年11月29日

発行者: William Ash

発行所: [Hakusan Creation](#)、[www.hakusancreation.com](http://www.hakusancreation.com)

印刷所: Ingram Spark

装丁・フォーマット・デザイン by William Ash

©2016 by Hakusan Creation

©2016 Naomi Otsubo

All rights reserved. Published by Hakusan Creation

ISBN:978-1-935461-08-1

Printed in the United States of America

